

県営西伯地区広域農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡岸本町

KO MACHI DAI ICHI

小町第1遺跡

1996

財団法人 鳥取県教育文化財団

序

鳥取県西部地域の岸本町は、東に秀峰大山を仰ぎ、北に遠く日本海が望まれる、美しい自然環境に恵まれた地域であります。さらに、古くから遺跡の宝庫としても知られており、割石小口積み・持ち送り式の構築法を用いた横穴式石室を持つ吉定1号墳、国指定重要文化財の石製鰐尾が出土した大寺廃寺など、古代人の生活や当時の活発な交流を物語る貴重な遺構・遺物が数多く存在しております。

当財団では、平成7年度に鳥取県からの委託を受け、西部埋蔵文化財越敷野地区ふるさと農道調査事務所が、県営西伯地区広域農道整備事業に伴う岸本町の小町第1遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、落し穴と考えられる土坑26基を確認することができました。これらの資料が今後の調査研究の一助となり、本報告書が多方面にわたって広く活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、本調査に際しまして、多大な御理解と御協力をいただきました地元の皆様をはじめ、御指導いただきました方々、その他の関係各位に対し、心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成8年2月28日

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 田 淵 康 充

例　　言

1. 本報告書は、「県営西伯地区広域農道整備事業」に伴い1995年度に実施された、岸本町小町に所在する小町第1遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財越畠野地区ふるさと農道調査事務所が行った。
3. 本報告書で示す標高は建設省水準点(BM-4) H=158.583mを起点とした標高値で、方位は真北である。
X : 、Y : の数値は国土座標第V系を使用した。
4. 本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」の一部を使用した。
5. 本報告書の作成は、調査員、調査補助員の討議に基づいて執筆・編集し、執筆担当者は目次に記載した。
担当調査員は山田・鬼頭・谷村、調査補助員は樋口である。
挿図内の、遺構実測は調査員、補助員が行った。
遺構・遺物写真は調査員が行った。
6. 出土遺物・図面等は、当面鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
7. 現地調査及び報告書作成にあたって下記の機関から助言・指導を頂いた。

会見町教育委員会 岸本町教育委員会

凡　　例

1. 調査区には10m×10mグリッドを設定した。任意の基準点より、南北・東西のラインで10mごとの割り付けを行い、南北ラインをアラビア数字、東西ラインをアルファベットで表し、該当グリッドの北西隅交点をそのグリッド名とした。
2. 本報告書における遺構記号・遺物記号は下記のように表す。
SK：土坑 SD：溝状遺構
Po：土器・土製品
3. 遺構挿図中におけるセクション、エレベーションの基準線標高は「H=」の記号で表記する。
4. 落し穴の遺構図においては、杭痕跡の輪郭線を赤色で表記する。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯（鬼頭）	
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	1
第3節 調査体制	2
第2章 位置と環境（山田）	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 小町第1遺跡の調査（鬼頭）	
第1節 土坑	10
第2節 その他	44
第3節 出土遺物	49
第4章 まとめ（山田・鬼頭）	51
表1 小町第1遺跡土坑一覧表	50
表2 深さ別土坑基数	51
表3 鳥取県内落し穴一覧表	55
表4 小町第1遺跡遺構一覧表	57
挿図	
挿図1 遺跡位置図	6
挿図2 造構全体図	7
挿図3 剣辺遺跡分布図	9
挿図4 SK-1造構図	11
挿図5 SK-2造構図	13
挿図6 SK-3造構図	15
挿図7 SK-4造構図	17
挿図8 SK-5造構図	18
挿図9 SK-6造構図	19
挿図10 SK-7造構図	21
挿図11 SK-8造構図	23
挿図12 SK-9造構図	25
挿図13 SK-10造構図	27
挿図14 SK-11造構図	28
挿図15 SK-12造構図	30
挿図16 SK-13造構図	31
挿図17 SK-14造構図	32
挿図18 SK-15造構図	33
挿図19 SK-16造構図	35
挿図20 SK-17・18造構図	36
挿図21 SK-19造構図	37
挿図22 SK-20造構図	39
挿図23 SK-21造構図	41
挿図24 SK-22造構図	42
挿図25 SK-23造構図	43
挿図26 SK-25・26造構図	45
挿図27 SK-24造構図	47
挿図28 小町第1遺跡出土遺物	49
図版	59

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

鳥取県西伯郡岸本町地域における県営西伯地区広域農道整備事業に伴い、埋蔵文化財発掘調査が西部埋蔵文化財越敷野地区ふるさと農道調査事務所によって平成7年に行われた。

この県営西伯地区広域農道のルートにあたる西伯郡岸本町小町地内は、周知の遺跡である小町第1遺跡が存在しており、また平成6年に岸本町教育委員会が実施した試掘調査によって遺構の存在が予想された。そのため財団法人鳥取県教育文化財団が記録保存のための発掘調査の委託を鳥取県より受け、西部埋蔵文化財越敷野地区ふるさと農道調査事務所が担当して埋蔵文化財発掘調査を行った。

第2節 発掘調査の経過と方法

小町第1遺跡の調査対象面積は、3,330m²であり、平成7年4月から発掘調査に着手した。

調査に先立ち、業者委託による調査前の地形測量を行った。まず、土層を確認するためトレンチを設定し掘り下げた。表土は重機で除去し、その後、人力による精査・検出を行った。表土はぎ終了後には業者委託による10m×10mグリッドの設定を行い、遺構の測量等に活用した。

遺跡の西側から東側に向かって調査をすすめてゆき、土坑（落し穴）26基を検出した。遺構の検出・実測終了後、業者委託による調査後地形測量を行った。最終的に調査が終了したのは7月11日である。

また、6月29日に、地元、岸本町小町の方々を対象とした現地説明会を行った。

なお、最終的に調査した面積は、2,853.6m²である。

第3節 調査体制

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	田淵 康尤(県教育長)
常務理事	上田 徹(県教育次長)
事務局長	若松 良雄
財団法人鳥取県教育文化財団	鳥取県埋蔵文化財センター
所長	宮谷 正信(鳥取県教育委員会文化課長)
次長	八木谷 昇
庶務係	
係長	梅山 昭美(鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長)
主任事務職員	米村 康夫
事務職員	田中 陽子
調査指導係	
係長	田中 弘道(鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係長)
文化財主事	久保 積二朗(〃 文化財主事)
〃	長岡 充展(〃〃)
〃	山耕 雅美(〃〃)

○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財越後野地区ふるさと農道調査事務所

所長	船森 康弘
主任調査員	山田 真一
調査員	谷村 憲一
〃	鬼頭 紀子
調査補助員	樋口 友枝
整理員	長江 方子

○整理作業参加者

西村薫子

○調査指導 鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力 鳥取県西伯郡岸本町 岸本町教育委員会

○下記の方々に発掘調査作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。

荒井 玉江	石橋 公子	岩本美保子	潤 藤子	遠藤 寛一	大橋 幡晏
小澤 三郎	佐伯 進	下本 愛子	陶山 静恵	田口 雅通	谷村 末吉
露無 克子	仲田 茂子	仲田 茂	花房 幸子	前田 貞良	元次美恵子
森安 令公	安田 貞則	(敬称略 五十音順)			

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

鳥取県

鳥取県は山陰地方の東部に位置する県で、総面積は3,506.96km²、総人口は614,954人(平成7年10月1日国勢調査)である。北は日本海に面し、南は標高1,711mの大山を最高峰とした中国山地が連なっている。従って夏は高温多湿で、冬は日照時間が短く降雪も多いという日本海側特有の気候の様相を示している。

県域の大半は山地である。平地は東部の千代川下流域、中部の天神川下流域、西部の日野川下流域に沖積平野が発達しており、それぞれ鳥取平野、北条平野、米子平野と呼称されている。また、河川によって運ばれた多量の砂が、冬の北西の季節風の影響によって河口付近に堆積して、砂丘や砂州を発達させている。東部には鳥取砂丘、中部には北条砂丘といった砂丘がみられ、西部には砂州が発達して、弓ヶ浜半島を形成している。

生活域は上記の平野を中心として展開している。東部には県庁所在地鳥取市があり、県の政治の中心地となっている。中部はその中流域の安定した平野を中心に発達し、現在倉吉市が位置する。西部には日野川下流に米子市があり、古くから経済の中心として発展している。また、弓ヶ浜半島の先端の境港市は、日本海側有数の漁港境港を基地として栄えている。

生業は、古くから米どころとして稲作が盛んである。また中部の丘陵を中心とする二十世紀梨や、砂丘地での長いも・らっきょうなど、地形・地質の特質を生かした特産品も多い。漁業も境港を中心に栄えており、特に冬のマツバガニ漁は有名である。また、県内には山陰海岸国立公園と大山隠岐国立公園の2つの国立公園があり、温泉やスキー場等も多く、観光産業も発展している。

岸本町

西伯郡岸本町は大山西麓に位置する総面積39.61km²・総人口7,100人(平成7年10月1日国勢調査)の町である。町域の西寄りには、日野川が南北に流れおり、この川を境に地形は異なっている。右岸は大山の裾野から緩やかに下っていく台地で、標高60mの辺りで日野川の侵食を受け段丘崖となって落ち込んでいる。左岸は南端に高塚山(標高270m)、南西端に越敷山(標高227m)があり、起伏のある丘陵地形であるが、その北端部分には大山の火山噴出物が堆積し、右岸と良く似た台地状の地形となっている。平野は町の南側半分は日野川の右岸に狭い沖積がみられる程度であるが、ほぼ中央のあたりから急に開け、米子平野(地元の人は箕ヶ屋平野と呼ぶ)となって下流へと広がっていく。

交通は、日野川沿いに国道181号線・JR伯備線が走っており、北に隣接する米子市との交通の便は非常に良好である。従って、近年米子市のベッド・タウンとして発達しており、団地の造成も行なわれている。この結果、平成7年国勢調査の結果では、人口減少の多い県内の市町村の中で、最高の人口増加率を示している。

調査地

小町第1遺跡は、小町字谷奥に位置する。小町集落は日野川左岸丘陵の細長い谷地形に築かれ、集落名は平安歌人小野小町によるという伝説もある。小町第1遺跡は、小町集落の背後の標高165m程度の丘陵上に位置する。

ここは越敷山山裾と高塚山山裾のほぼ中間に当たり、緩やかな傾斜をもった丘陵地となっている。周辺は丘陵上でネギ等の畑作が行なわれ、斜面では梨が作られている。また、谷部分では棚田を利用した稲作が盛んに行なわれている。

第2節 歴史的環境

本節では、岸本町を中心にその周辺地域も含めた歴史的環境を概観する。なお遺構の名称の後に、()で示した数字は、挿図3の周辺遺跡分布図に対応する。

先土器時代～縄文時代

現在、岸本町内で確認されている考古資料の中で、最も時期の遅いものは、大山の裾野にあたる日野川右岸丘陵の久古地区で採集されたサヌカイト製の有舌尖頭器である。この形態の石器は、一般に先土器時代の終わり頃から縄文時代草創期にかけて、製作・使用されたと考えられている。しかし同じ日野川右岸の台地上に位置する溝口町長山馬籠遺跡(72)をはじめとして、先土器時代のものと考えられる打製石器が大山山麓ではいくつか確認されており、将来、岸本町内でも先土器時代の石器が発見される可能性は十分に考えられる。

縄文時代の遺構としては、林ヶ原遺跡(31)で墓の可能性のある土塚が確認されている。また、この時代の狩猟用の落し穴と考えられるものが数多くみつかっており、これらは日野川の両岸に広がる丘陵地の至る所につくられてるものと思われる。日野川右岸丘陵に位置する遺跡として、先の林ヶ原遺跡の他に、久古第3遺跡(39)・貝田原遺跡(24)・北田山遺跡・番原第1遺跡(23)があり、左岸丘陵に位置するものとしては、小町越敷野原第1遺跡(2)・越敷山遺跡群(61)・坂長宮田ノ上遺跡(5)・坂中第5遺跡(6)・大寺原遺跡(13)が挙げられる。

周辺地域では、日野川を下った右岸丘陵上の米子市上福万遺跡(45)で、墓の可能性が考えられる大規模な早期の土塚群・集石群が確認されている。また同じ日野川右岸丘陵を遡った溝口町長山馬籠遺跡では前期の堅穴住居跡が確認されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡も、縄文時代と同じく日野川両岸の丘陵上に分布している。日野川右岸丘陵では、上述の林ヶ原遺跡・貝田原遺跡等で住居跡が確認されているが、いずれも中期のもので、現状では縄文時代との間に時間的空白が認められる。また標高350mの高原に位置する藍野遺跡では、石斧・石磨丁がみつかっており、高地でも作物の耕作が行なわれていたことを示している。日野川右岸丘陵では、越敷山北麓から北に延びる台地（長者原古地）に位置する大寺原遺跡(13)や坂中第5遺跡(6)で住居跡が確認されている。この台地の先端近くには、大規模な集落遺跡として有名な米子市青木遺跡・福市遺跡が存在しており、台地上の広い範囲に集落が存在していたことが想定される。

周辺地域では、日野川を若干下った右岸丘陵上に環濠を伴う集落が築かれている。前期の米子市尾高御建山遺跡(36)でその可能性をもつものが認められているが、後期の米子市尾高浅山遺跡(42)・日下寺山遺跡(44)では環濠集落に近接して四隅突出型墳丘墓が築かれており、地域集団が確立されていた様子がうかがわれる。米子（箕蚊屋）平野を望む日野川右岸の同地形の丘陵は町内まで連なっており、また日野川上流の清口町内でも四隅突出型墳丘墓が確認されていることから、町内にも同種の遺構が存在している可能性も考えられる。

古墳時代

古墳時代前期から中期にかけての大型古墳は、長者原台地を挟んで西隣に位置する会見地域に集中する。三角縁神獣鏡を出土した会見町普段寺1号墳（前方後方墳）は、畿内型の古墳としては県内で最古のものと考えられる。また会見町三崎殿山古墳は全長約110mの前方後円墳で、県内最大級の規模を誇る。

後期に入ると、岸本町内でも特色ある古墳が築かれている。日野川右岸丘陵の吉定1号墳(26)は、割石小口積みによる古式の横穴式石室をもち、山陰地方における横穴式石室の導入を考えるうえで貴重な資料である。また岸本7号墳(17)は、横穴式石室をもつ大型の方墳（あるいは円墳）である。日野川左岸丘陵にも、越敷山山頂の

前方後円墳（越敷山13号墳－3）をはじめとして、その山麓丘陵に数多くの古墳がつくられるようになる。特に北麓の長者原台地の日野川沿いの辺りにその分布が集中しており（越敷ヶ丘古墳群－10・長者原古墳群－15）、後期以降、この地域にこれらの古墳群を築いた集団が成立していたことがうかがわれる。一方、大型の古墳を築造していた会見地域では、この時期にはその規模が縮小していく傾向が認められる。

古 代

律令体制の下で、日野川中・下流域は伯耆国会見郡として編成される。古墳時代後期に多数の古墳が築かれた長者原台地周辺には、白鳳時代に大寺庵寺（9）・奈良時代後半に坂中庵寺（7）といった寺院が創建される。また坂中庵寺に隣接する長者屋敷遺跡（32）では大型の掘立柱建物群が確認されており、豪族の居館あるいは伯耆国会見郡の都衙といった可能性が考えられている。このように、この地域は古代の会見郡の中心的な位置を占めていたものと思われる。

この地域に精力をあげていた豪族として、紀氏の名が史料に表れており、上述の遺構との関連が注目される。紀氏は、平安末期に国司として土着した紀成盛のときに最盛期を迎え、長者原台地に大邸宅を構え勢力を誇ったといわれている。

中 世

律令体制の基礎をなしていた班田制は、豪族の私有地拡大の動きとともに崩れ始め、各地に荘園が発達する。岸本町内には、中世の荘園として日野川右岸に中間莊・久古牧・大山莊、左岸に八幡莊が所在したとされる。

鎌倉幕府倒幕から南北朝時代にかけては、殿河内の豪族、巨勢宗国が後醍醐天皇を助け、以後南朝側について活躍したと伝えられている。その後の伯耆國の領国支配権は、激しい戦乱を繰り返し、守護山名氏から戦国大名尼子氏へ、さらに戦国大名毛利氏へと移っていく。この間の山名方の行松氏の居城が米子市の尾高城（41）であるが、岸本要害（18）はこの尾高城の砦あるいは播州三木城の出城と考えられている。

近 世

江戸時代の幕藩体制下で、因幡と伯耆は統合され、鳥取池田藩32万石として編成される。また米子城が築造され、伯耆の中心は倉吉から米子へと移るようになる。

この時代、幕藩体制の経済基盤である農民の年貢を確保するために、盛んに新田開発が行なわれた。その中でも長者原台地の開発は藩内でも有名なものである。特に、日野川の水を取り入れるための全長8.8kmに及ぶ用水路（佐野川）の開設は、中断期間も含めて243年の期間、数十万人の人手を要した大事業であった。

近 代

明治維新的廢藩置県及びその後の整備統廃合によって、鳥取藩は廢止され鳥取県が置かれる。1889（明治22）年には市制町村制が施行され、旧村の大規模な合併が行なわれる。この結果現在の岸本町内には、大幡村・幡郷村・日吉村・吉寿村の4つの村が設置される。また1896（明治29）年に実施された郡制により、会見郡と汗入郡は統合され西伯郡となる。郡制は1923（大正12）年に廃止されるが、以後も行政区画として残っている。

1876（明治6）年、明治政府は徵兵令を発布するが、幕末から明治初年にかけての凶作続々で困窮していた農民は、徵兵反対と米価の引き下げを要求して集団で蜂起した。騒動は5日間に及び、会見郡ほぼ全域に広がる大規模なものとなった。これは会見血税一揆と呼ばれ、現在も語り伝えられている。

現 代

第2次大戦後、全国的に合理的な町村規模の検討が行なわれ、県内でも町村合併が進められる。その結果、西伯郡大幡村・幡郷村（大字諸木を除く）・日野郡八郷村（1912年、日吉村と吉寿村が合併）を合体合併することに

なった。新町名は一般募集によって、国鉄の駅の名前で知られている岸本に決定し、こうして1955（昭和30）年に、現在の行政区分の西伯郡岸本町が成立した。近年は米子市への交通の便が非常によいため、米子市のベッド・タウンとしても発達している。

〈参考文献〉

『岸本町誌』 1983 岸本町

『旧石器・縄文時代の鳥取県』 1988 鳥取県埋蔵文化財センター

『弥生時代の鳥取県』 1987 鳥取県埋蔵文化財センター

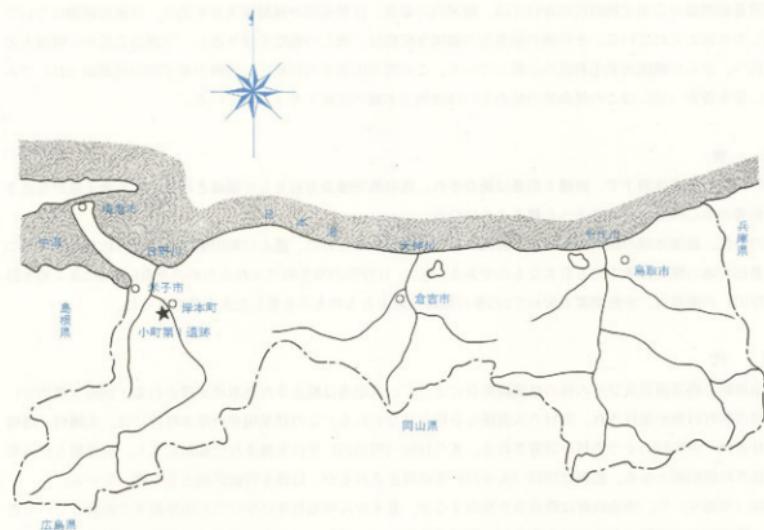
『歴史時代の鳥取県』 1989 鳥取県埋蔵文化財センター

『尾高御建山遺跡II・尾高古墳群II・尾高1号横穴墓』 1995 財団法人鳥取県教育文化財団

建設省倉吉工事事務所

『大寺原遺跡発掘調査報告書』 1981 岸本町教育委員会

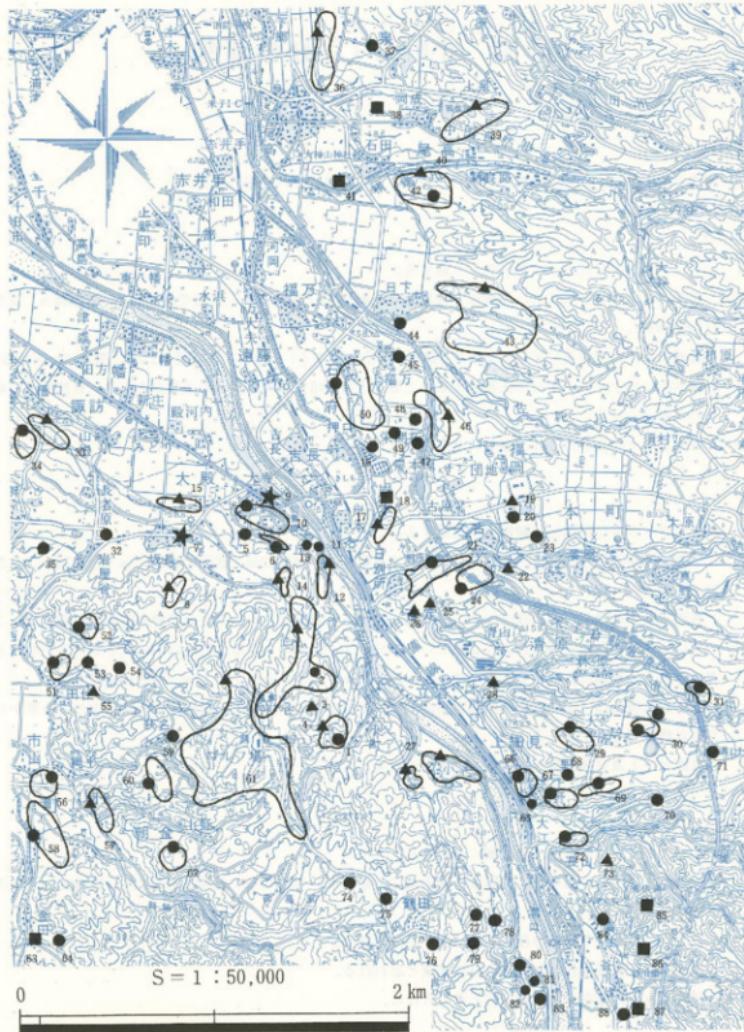
『久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡』 1984 財団法人鳥取県教育文化財団



挿図1　遺跡位置図



挿図2 小町第1遺跡遺構全体図



1. 小町塚古墳群
2. 稲荷山古墳群
3. 銀鏡山古墳群
4. 時所在墓古墳群
5. 墓古墳群
6. 墓古墳群
7. 墓中魔芋
8. 楠木古墳群
9. 久古寺古墳群
10. 佐野古墳群
11. 佐野古墳群
12. 佐野古墳群
13. 大寺原古墳群
14. 佐治原古墳群
15. 佐野原古墳群
16. 佐野原古墳群
17. 草木古墳群
18. 草木古墳群
19. 佐原古墳群
20. 佐原古墳群
21. 久古寺 2 古墳群
22. 久古寺古墳群
23. 佐原古墳群
24. 佐原古墳群
25. 口別古墳群
26. 雪北古墳群
27. 佐原古墳群
28. 大平古墳群
29. 大平原第 1 古墳群
30. 大平原第 2 古墳群
31. 佐原古墳群
32. 長若原古墳群
33. 佐原古墳群
34. 佐原古墳群
35. 佐原古墳群
36. 佐原古墳群
37. 佐原古墳群・糸前田遺跡
38. 佐原古墳群
39. 佐原古墳群
40. 佐原古墳群
41. 佐原古墳群
42. 佐原古墳群
43. 佐原古墳群
44. 佐原古墳群
45. 佐原古墳群
46. 佐原古墳群
47. 佐原古墳群
48. 佐原古墳群
49. 佐原古墳群
50. 佐原古墳群
51. 佐原古墳群
52. 佐原古墳群
53. 佐原古墳群
54. 佐原古墳群
55. 佐原古墳群
56. 佐原古墳群
57. 佐原古墳群
58. 佐原古墳群
59. 佐原古墳群
60. 佐原古墳群
61. 佐原古墳群
62. 佐原古墳群
63. 佐原古墳群
64. 佐原古墳群
65. 佐原古墳群
66. 佐原古墳群
67. 佐原古墳群
68. 佐原古墳群
69. 佐原古墳群
70. 佐原古墳群
71. 佐原古墳群
72. 佐原古墳群
73. 佐原古墳群
74. 佐原古墳群
75. 佐原古墳群
76. 佐原古墳群
77. 佐原古墳群
78. 佐原古墳群
79. 佐原古墳群
80. 代代木古墳群
81. 代代木古墳群
82. 平代木古墳群
83. 代代木古墳群
84. 代代木古墳群
85. 鬼住山塚
86. 鬼住山塚
87. 谷川川
88. 谷川川

插図 3 周辺遺跡分布図

第3章 小町第1遺跡の調査

第1節 土坑

本年度の調査では、土坑が総計26基検出された。以下、その内容について報告する。

SK-1

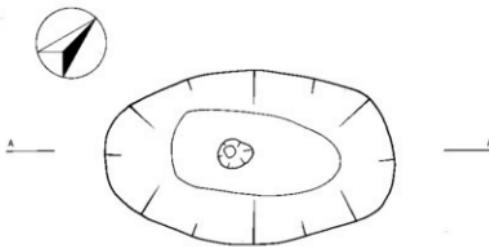
- 位 置 B 4 グリッドに位置し、緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は橢円形を呈する。規模は、検出面で長軸118cm・短軸71cm、底面で長軸69cm・短軸34cm、深さ117cmを測る。
底面には、ほぼ中央にピット（以下、底面ピットと称する）を持ち、その径は15cm、深さ16cmを測る。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積したものと考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在により、落し穴と考えられる。

SK-2

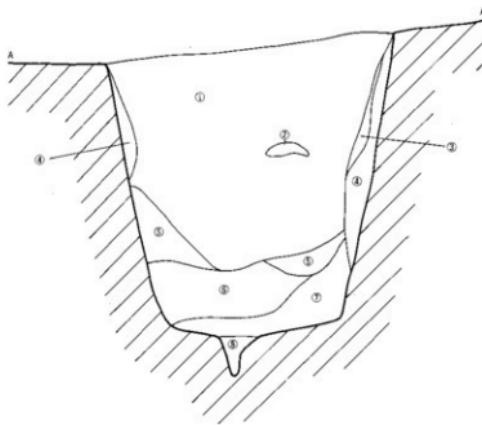
- 位 置 B 4 グリッドに位置し、緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は橢円形を呈する。規模は、検出面で長軸86cm・短軸82cm、底面で長軸83cm・短軸78cm、深さ76cmを測る。
底面ピットを持ち、その径は20cm、深さ35cmを測る。底面ピットの埋土は黄橙茶灰褐色粘質土で、この中には黒灰褐色土が棒状に入りこんでいる部分が2ヶ所認められる。これは木の杭を立てていた痕と考えられる。東側に位置するものが径3cm、深さ15cm、西側のものが径4cm、深さ19cmである。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合層からの自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピット及び杭痕跡の存在から、落し穴と考えられる。

SK-3

- 位 置 F 6 グリッドに位置し、緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は橢円形を呈する。規模は、検出面で長軸101cm・短軸72cm、底面で長軸75cm・短軸48cm、深さ85cmを測る。
底面ピットを持ち、その径は20cm、深さ39cmを測る。
- 埋 土 基本的に、黒灰褐色土からなる自然堆積と思われる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。



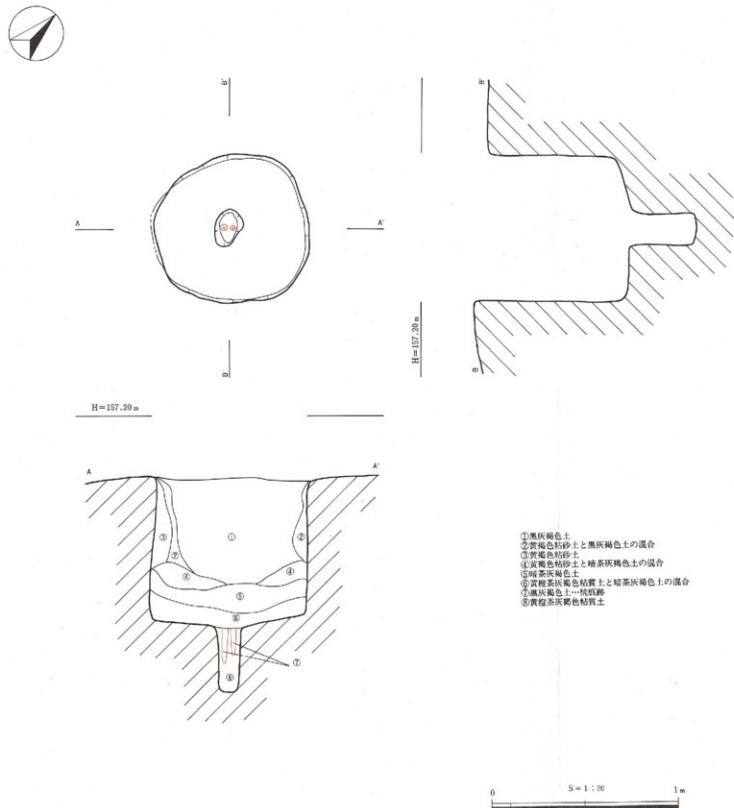
$H = 158.00 \text{ m}$



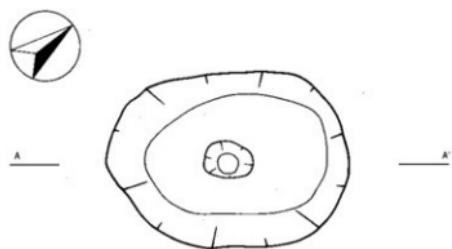
- ① 黒灰褐色土
- ② 黄橙茶褐色粘土ブロック
- ③ 黑灰褐色土 (黄橙茶褐色粘土少量混入)
- ④ 黄橙茶褐色粘土
- ⑤ 黄橙茶褐色粘土と黒灰褐色土の混合
- ⑥ 増灰条痕褐色土
- ⑦ 黑灰褐色粘土と暗黑茶灰褐色土の混合
- ⑧ 黄橙茶褐色粘土質土

0 S = 1 : 20 1m

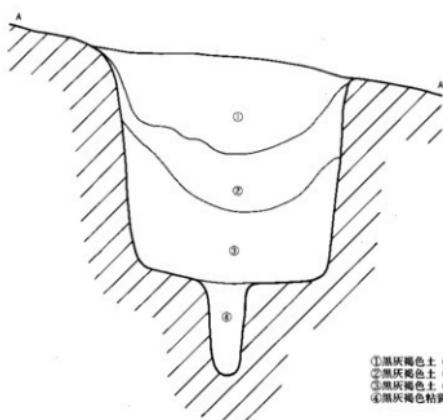
挿図4 SK-1 造構図



插図 5 SK-2 造構図



$H=163.00\text{m}$



$S=1:20$
0 1m

挿図 6 SK-3 造構図

SK-4

- 位 置 H 5 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形はほぼ円形を呈する。規模は、検出面で長軸96cm・短軸89cm、底面で長軸50cm・短軸44cm、深さ160cmを測る。
底面ピットは存在しない。
- 埋 土 上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットは存在しなかつたが、形態及び周囲の土坑との埋土比較から、落し穴と考えられる。

SK-5

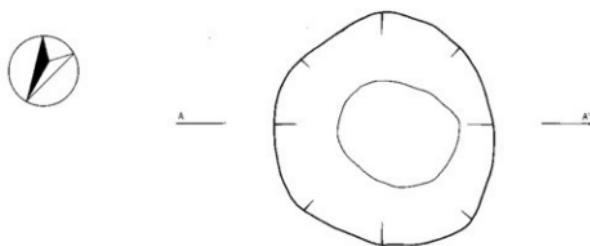
- 位 置 H 5 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に位置する。
- 形 態 平面形は長方形を呈する。規模は、検出面で長軸259cm・短軸145cm、底面で長軸58cm・短軸47cm、深さ199cmを測る。
底面ピットは存在しない。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は黄橙茶褐色粘質土と暗茶灰褐色土の混合層からなり、自然堆積と考えられる。検出面には、土坑中央に橢円形を描くように焼土がみられる。埋土の状況から見て、この焼土は土坑に黒灰褐色土が堆積した後に生じたものであり、土坑とは直接関係のないものと考えられる。
- 性 格 底面ピットは存在しなかつたが、形態及び周囲の土坑との埋土比較から落し穴と考えられる。

SK-6

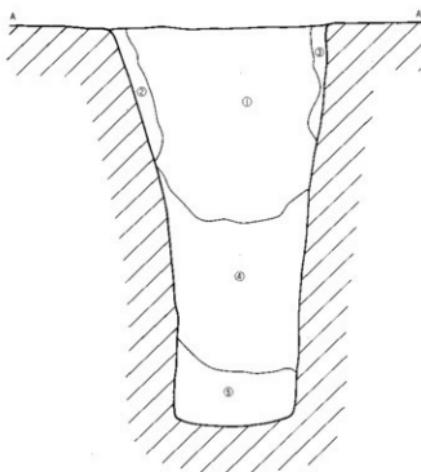
- 位 置 F 5 グリッドに位置し、緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸84cm・短軸73cm、底面で長軸73cm・短軸63cm、深さ105cmを測る。
底面ピットを持ち、その径19cm、深さ30cmを測る。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

SK-7

- 位 置 G 4 グリッドに位置し、緩斜面に立地する。調査区外にかかるため、全体の1/3ほどを検出したにとどまっている。
- 形 態 調査区内の形態より、平面形は長方形を呈するものと考えられる。規模は、いずれも検出できた範囲内の数値で、検出面で長軸88cm・短軸65cm、底面では短軸30cm、深さ179cmを測る。
底面ピットは存在しない。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は黄橙茶褐色粘質土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットは存在しなかつたが、形態及び周囲の土坑との埋土比較から落し穴と考えられる。



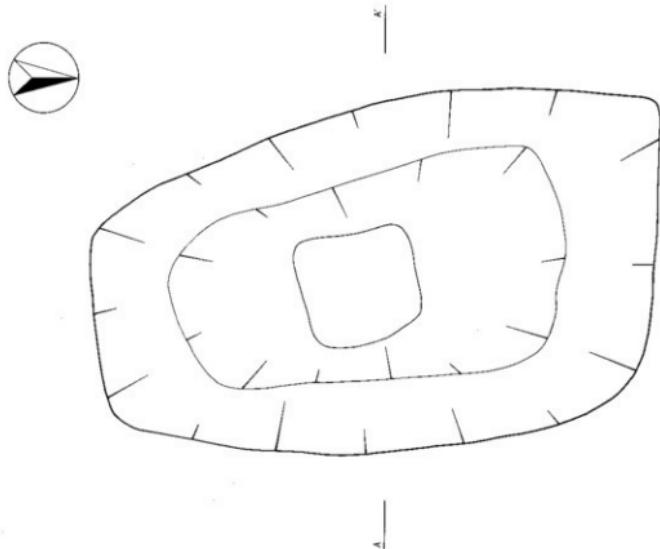
$H = 163.10 \text{ m}$



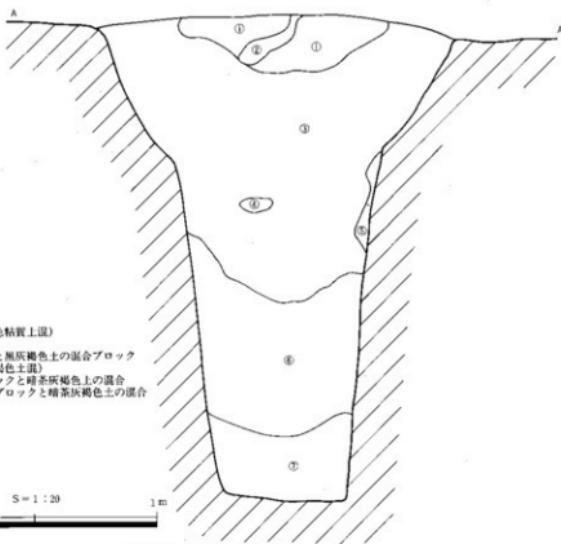
- ① 黒灰褐色土
- ② 時折紅褐色土（黄灰褐色粘土上面）
- ③ 黑灰褐色土（黄灰褐色粘土小ブロック微量混）
- ④ 黑灰褐色土（黄灰褐色粘土小ブロック混）
- ⑤ 暗茶灰褐色土（黄灰褐色粘土小ブロック混）

0 S = 1 : 20 1m

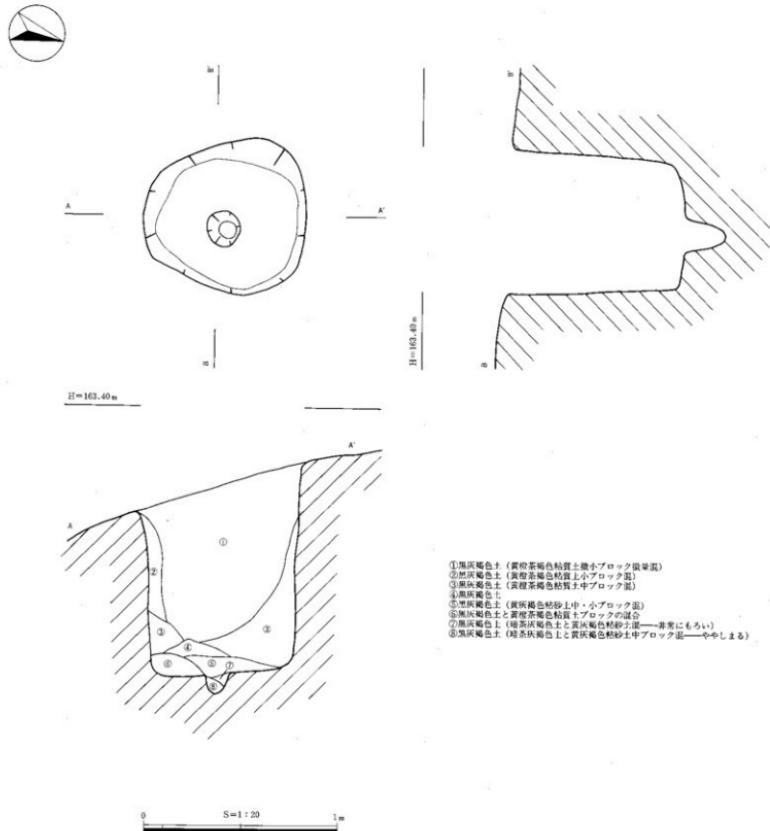
插図 7 SK-4 造構図



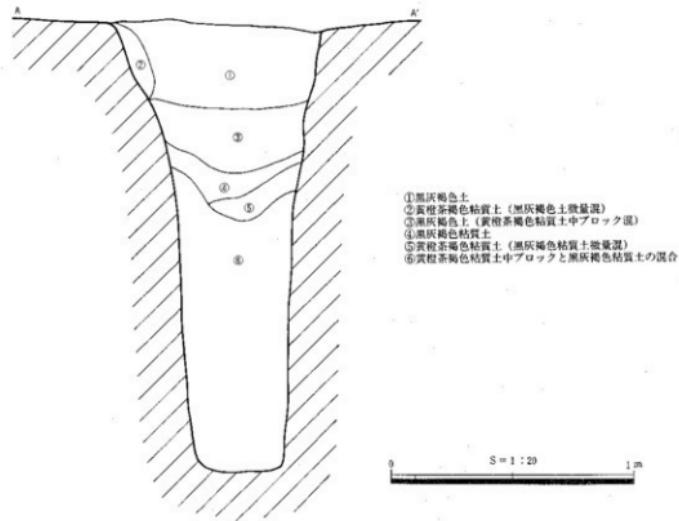
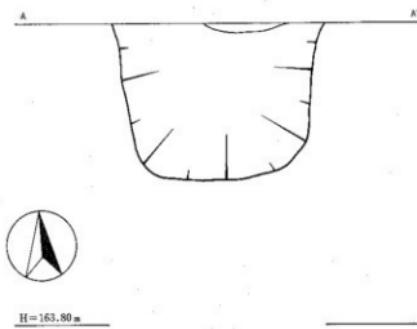
H = 165.30 m



挿図 8 SK-5 遺構図



挿図9 SK-6 造構図



插図10 SK-7 遺構図

SK-8

- 位 置 E 4 ~ E 5 グリッドにかけて位置し、緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸87cm・短軸75cm、底面で長軸65cm・短軸57cm、深さ85cmを測る。
底面ピットを持ち、その径19cm、深さ35cmを測る。底面ピットの埋土は暗茶灰褐色土で、この中には黒灰褐色土と暗茶灰褐色土が棒状に入りこんでいる部分が3ヶ所認められるこれは木の杭を立てていた痕と考えられる。いずれも径6cm、深さ20cm程度である。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は黄橙茶褐色粘質土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

SK-9

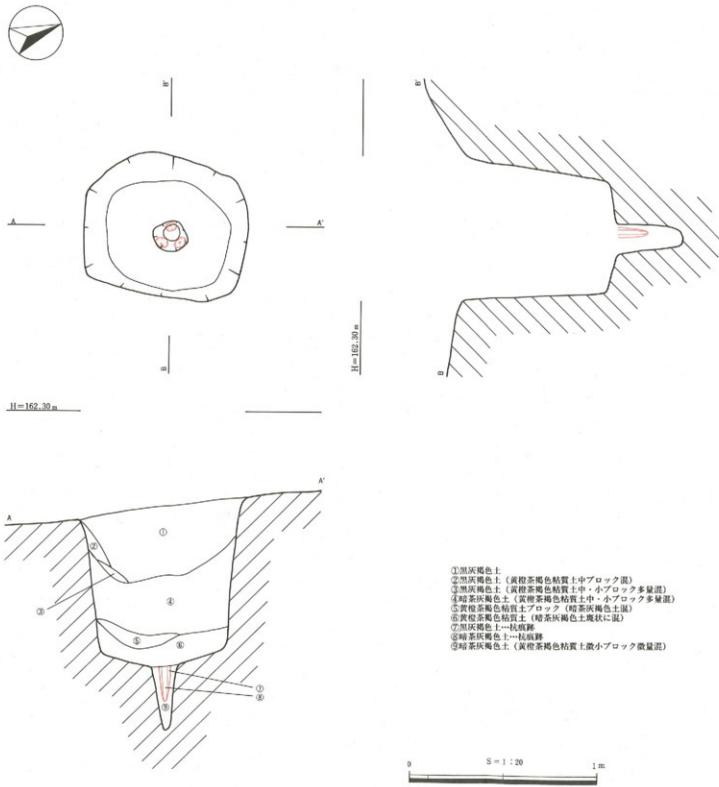
- 位 置 D 4 グリッドに位置し、斜面に立地する。
- 形 態 平面形は橢円形を呈する。規模は、検出面で長軸119cm・短軸85cm、底面で長軸69cm・短軸59cm、深さ109cmを測る。
底面ピットを持ち、その径14cm、深さ20cmを測る。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

SK-10

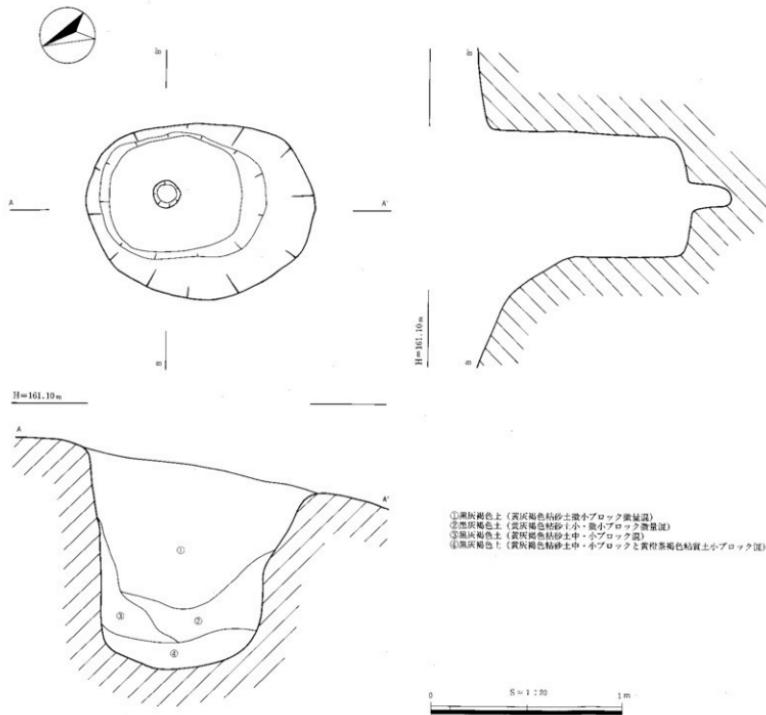
- 位 置 G 5 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は橢円形を呈する。規模は、検出面で長軸78cm・短軸74cm、底面で長軸82cm・短軸69cm、深さ82cmを測る。
土坑底面の中央よりやや東よりに底面ピットを持つ。その径は11cm、深さ18cmを測る。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

SK-11

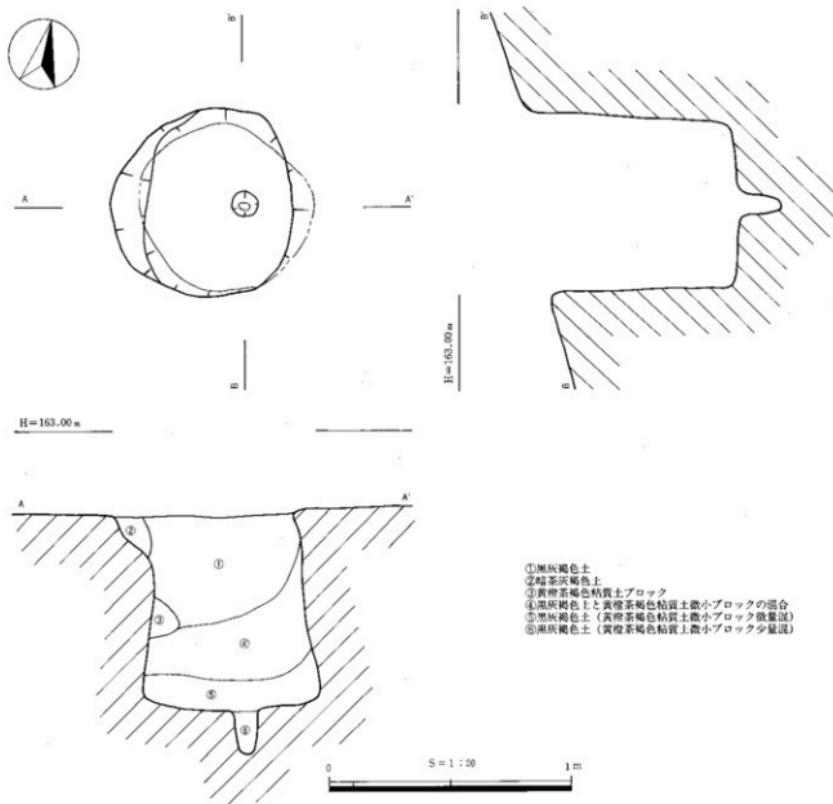
- 位 置 G 5 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は橢円形を呈し、断面形はフラスコ状である。規模は、検出面で長軸71cm・短軸63cm、底面で長軸87cm・短軸78cm、深さ90cmを測る。
底面ピットは存在しない。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットは存在しなかったが、周囲の土坑との埋土比較から落し穴と考えられる。



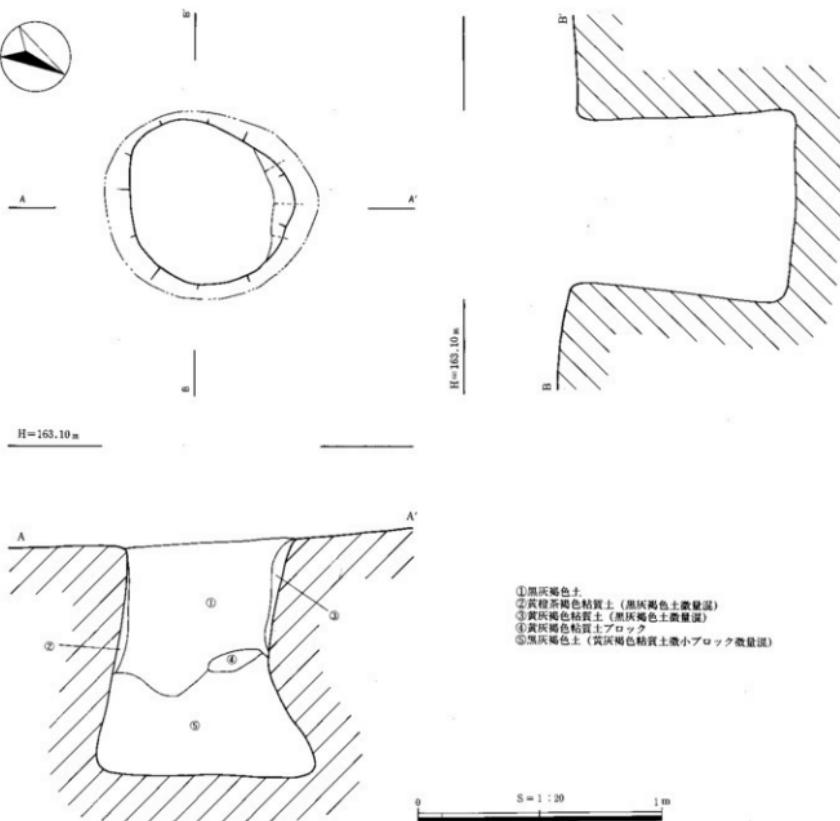
挿図11 SK-8 遺構図



插図12 SK-9 造構図



挿図13 SK-10 遺構図



挿図14 SK-11 造構図

S K - 12

- 位 置 G 5 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形はほぼ円形を呈する。その規模は、検出面で長軸96cm・短軸85cm、底面で長軸52cm・短軸45cm、深さ105cmを測る。
底面ピットを持ち、その径24cm、深さ17cmを測る。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

S K - 13

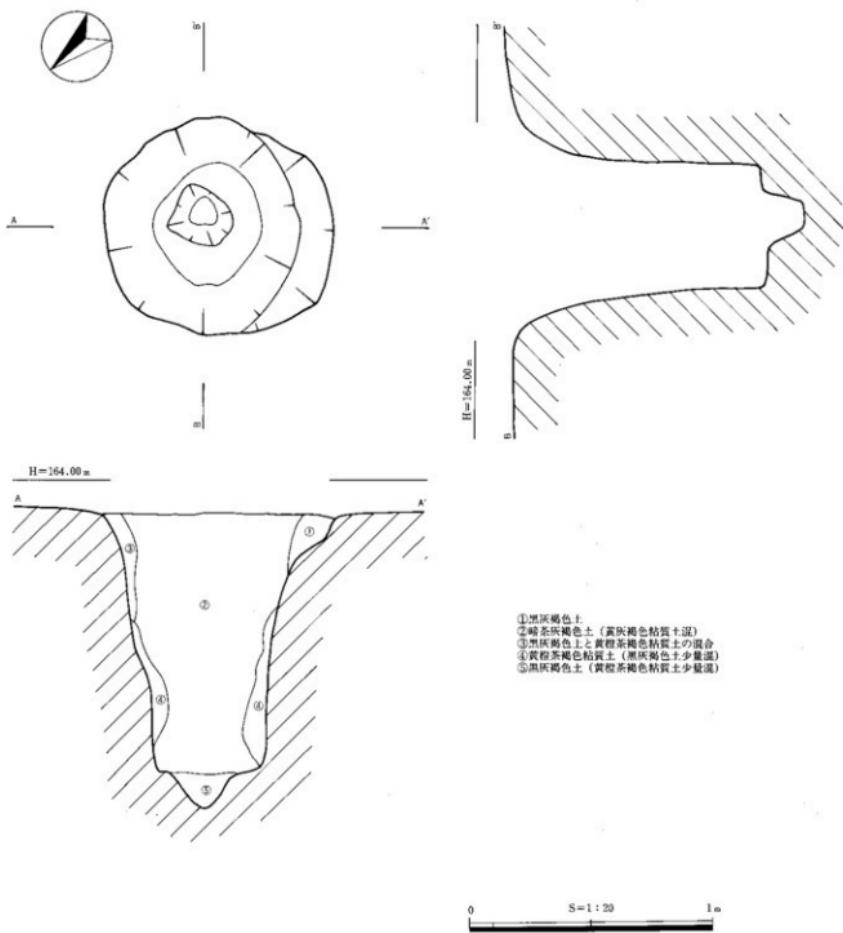
- 位 置 G 5 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸119cm・短軸93cm、底面で長軸49cm・短軸34cm、深さ120cmを割る。
土坑底面中央付近に、二つの小ピットを持つ。規模は南側のものが径7cm、深さ17cm、北側のものが径5cm、深さ10cmである。この小ピットは、規模・位置から見て、直接上坑底面に杭を立てた痕跡だと考えられる。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

S K - 14

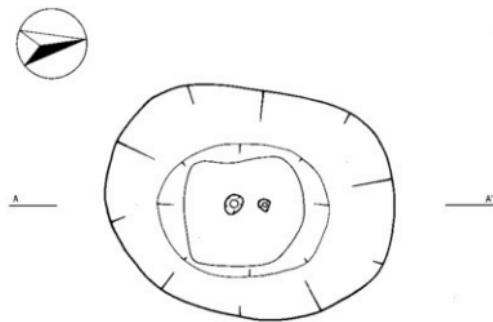
- 位 置 F 5 グリッドに位置し、谷上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は横円形を呈する。規模は、検出面で長軸117cm・短軸102cm、底面で長軸64cm・短軸60cm、深さ152cmを測る。
底面ピットは存在しない。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットは存在しなかったが、形態及び周囲の土坑との埋土比較から落し穴と考えられる。

S K - 15

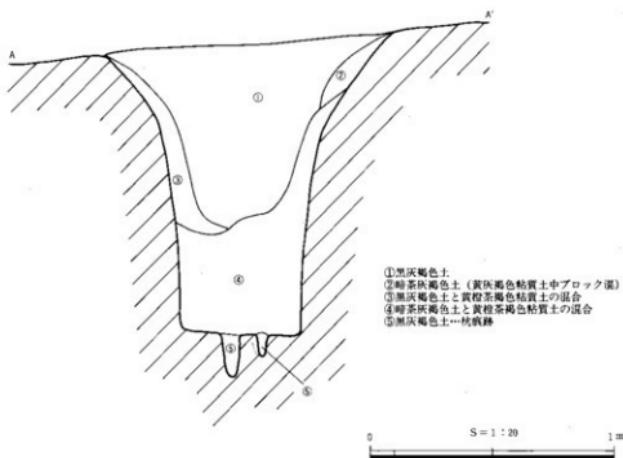
- 位 置 F 5 グリッドに位置し、谷上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は横円形を呈する。規模は、検出面で長軸92cm・短軸88cm、底面で長軸71cm・短軸65cm、深さ116cmを測る。
底面ピットは存在しない。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットは存在しなかったが、形態及び周囲の土坑との埋土比較から落し穴と考えられる。



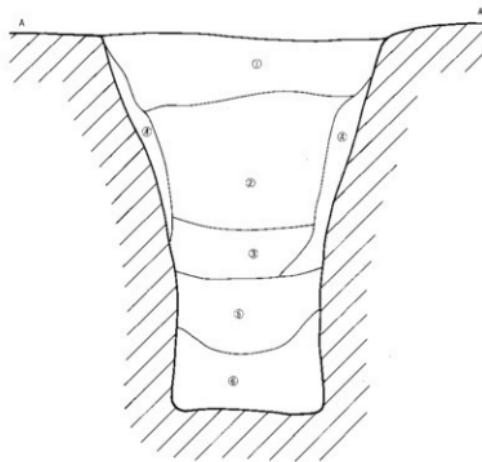
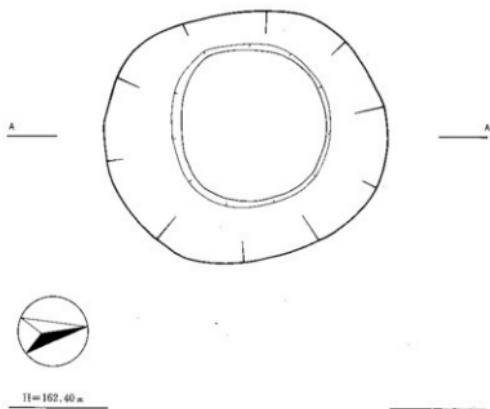
挿図15 SK-12 造構図



$H = 162.60 \text{ m}$



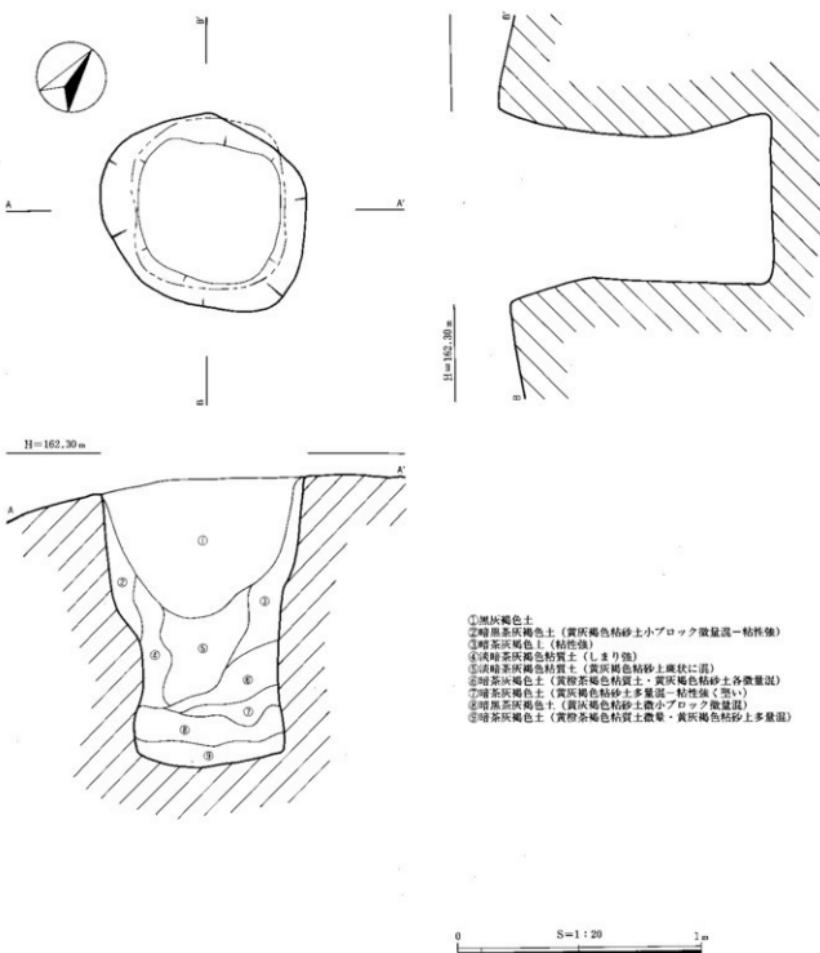
挿図16 SK-13 造構図



- ① 黒灰褐色土
- ② 黒灰褐色土（しまり弱くもろい）
- ③ 黒灰褐色土上（黄橙茶褐色土中・小・ブロック混）
- ④ 黄橙茶褐色粘質土
- ⑤ 黄茶灰褐色土
- ⑥ 黄茶灰褐色土（黄橙茶褐色粘質土微小・ブロック混）



插図17 SK-14 遺構図



挿図18 SK=15 造構図

SK-16

- 位 置 E 5 グリッドに位置し、谷部に立地する。
- 形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸106cm・短軸92cm、底面で長軸69cm・短軸55cm、深さ172cmを測る。
底面ピットは存在しない。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は黄灰褐色粘質土と暗茶灰褐色土の互層状堆積からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットは存在しなかったが、形態及び周辺の土坑との埋土比較から落し穴と考えられる。

SK-17

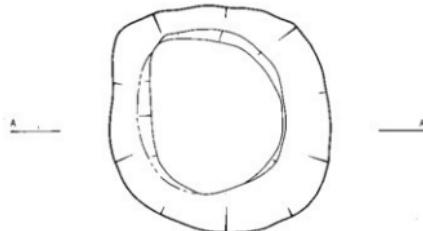
- 位 置 E 5 グリッドに位置し、谷部に立地する。
- 形 態 平面形はほぼ円形を呈する。規模は、検出面で長軸74cm・短軸68cm、底面で長軸67cm・短軸60cm、深さ12cmを測る。
遺構の上部は後世に削平されており、底面付近のみを検出した。
土坑底面中央付近に、二つの小ピットを持つ。規模は、各径7cm、深さ13cmを測る。いずれも、規模、位置から見て、直接土坑に杭を立てた痕跡だと考えられる。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系土層からなり、自然堆積したものと考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

SK-18

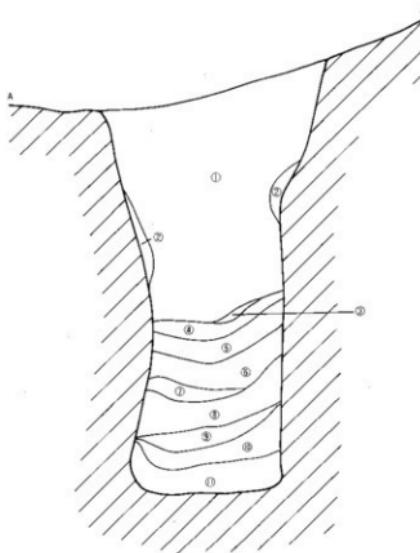
- 位 置 E 5 グリッドに位置し、谷部に立地する。
- 形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸88cm・短軸64cm、底面で長軸61cm・短軸41cm、深さ27cmを測る。
遺構の上部は後世に削平されており、底面付近のみを検出した。
底面ピットを持ち、その径17cm、深さ42cmを測る。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系土層からなる。埋土中からは4つの礫を検出した。落し穴のなかには杭を固定するため底面ピット付近に礫を置いたものが見られるが、SK-18の礫は底面より10cmほど浮いたところに存在するため、杭固定に伴うものかどうかは定かでない。その検出状況から流れこんだ礫である可能性が高い。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

SK-19

- 位 置 I 7 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は不定形を呈する。規模は、検出面で長軸137cm・短軸100cm、底面で長軸53cm・短軸50cm、深さ167cmを測る。
底面ピットは存在しない。
- 埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。
- 性 格 底面ピットは存在しなかったが、形態及び周辺の土坑との埋土比較から落し穴と考えられる。



H = 161.70 m



- ① 黒灰褐色土
- ② 暗灰褐色粘質土 (黒灰褐色土・黄褐色粘質土中・小ブロック層)
- ③ 黃灰褐色粘質土 (暗茶灰褐色土微量混)
- ④ 暗茶灰褐色粘質土 (黄灰褐色粘質土小ブロック多量混)
- ⑤ 黄褐色粘質土 (暗茶灰褐色土)
- ⑥ 黄灰褐色粘質土 (暗茶灰褐色土微量混・粘性ややかい)
- ⑦ 暗灰褐色粘質土 (黄灰褐色粘質土小ブロック少量混)
- ⑧ 黃灰褐色粘質土 (暗茶灰褐色土微量混・粘性弱い)
- ⑨ 暗茶灰褐色土と黄灰褐色粘質土の混合
- ⑩ 黄灰褐色粘質土 (暗茶灰褐色土微量混)
- ⑪ 暗茶灰褐色粘質土 (黄灰褐色粘質土・黄灰褐色砂質土微量混)

0 S = 1 : 20 1m

挿図19 SK-16 造構図

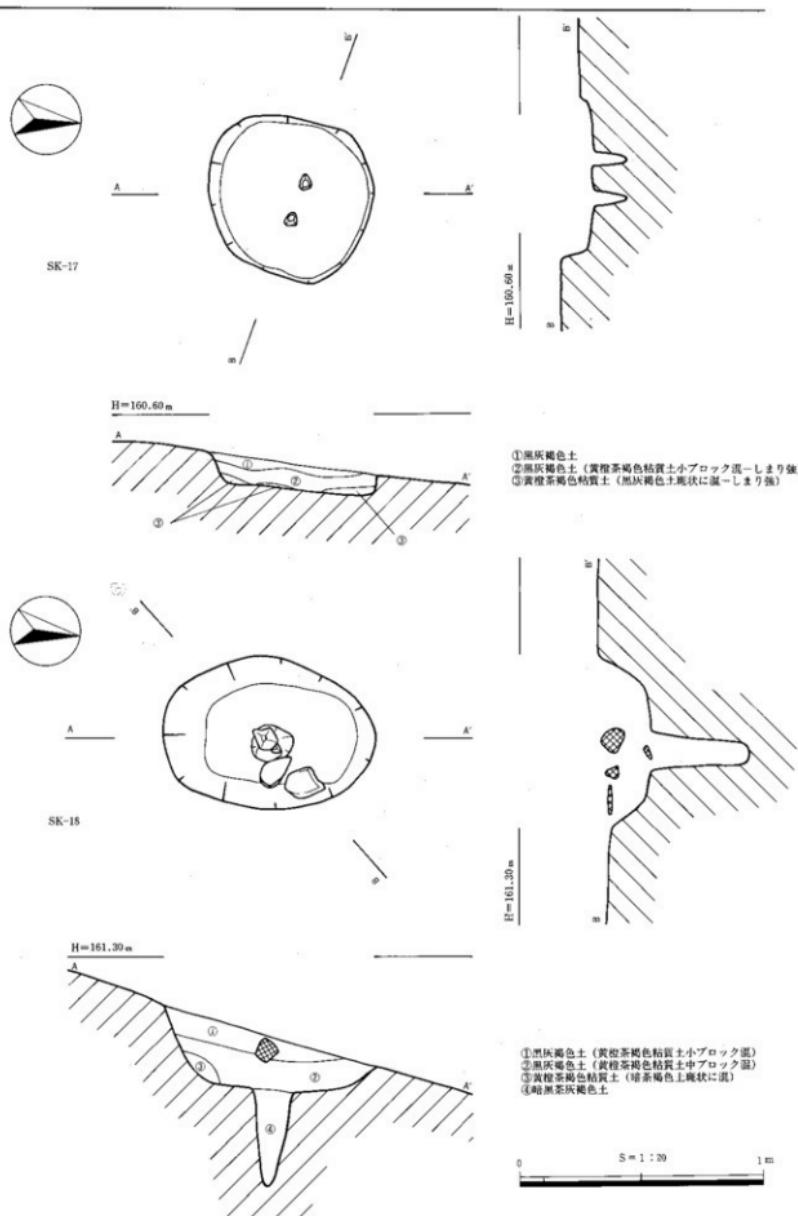
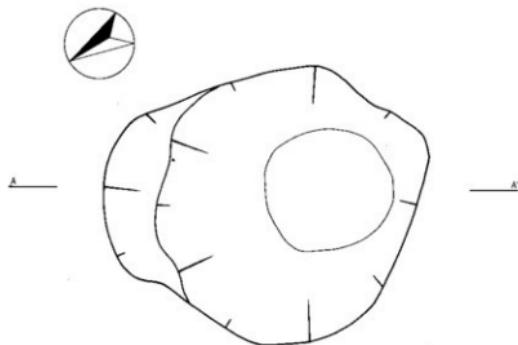
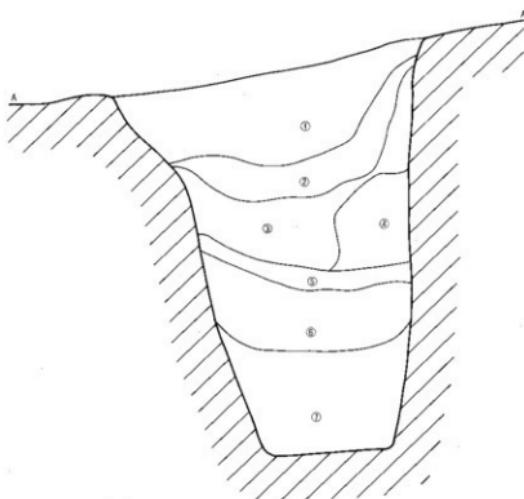


図20 SK-17・18 遺構図



$$\underline{H=163.70 \text{ m}}$$



- ①黒灰褐色土（黄緑茶褐色粘質土微小ブロック少混涙）
 - ②黒褐色土（黄緑茶褐色粘質土微小ブロック多混涙）
 - ③暗茶褐色土（黒灰褐色土中ブロック、黄緑茶褐色粘質土中、小ブロック多混涙）
 - ④暗茶褐色土Ⅱ（黄緑茶褐色粘質土中、小ブロック多混涙）
 - ⑤茶褐色粘質土（粘性強）
 - ⑥暗茶褐色粘質土（黄茶褐色粘質土小ブロック、黒灰褐色少混涙）
 - ⑦軽茶褐色粘質土（粘性弱）

$S = 1 : 20$

挿図21 SK-19 遺構図

S K - 20

位 置 J 8 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸90cm・短軸80cm、底面で長軸70cm・短軸64cm、深さ91cmを測る。

底面ピットを持ち、その径28cm、深さ30cmを測る。底面ピットの埋土は黒灰褐色土（黄橙茶褐色粘質土プロック少量混）で、この中には黒灰褐色土が棒状に入りこんでいる部分が7ヶ所認められる。これは木の杭を立てていた痕と考えられる。これらの規模は、いずれも径3cm程度、深さ10cm程度である。

埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

性 格 底面ピット及び杭痕跡の存在から、落し穴と考えられる。

S K - 21

位 置 I 7 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。

形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸102cm・短軸91cm、底面で長軸86cm・短軸80cm、深さ58cmを測る。

底面ピットは存在しない。

埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、底面付近は暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

性 格 不明である。

S K - 22

位 置 C 4 グリッドに位置し、斜面に立地する。

形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸74cm・短軸51cm、底面で長軸71cm・短軸51cm、深さ61cmを測る。

底面ピットを持ち、その径は17cm、深さ21cmを測る。

埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

S K - 23

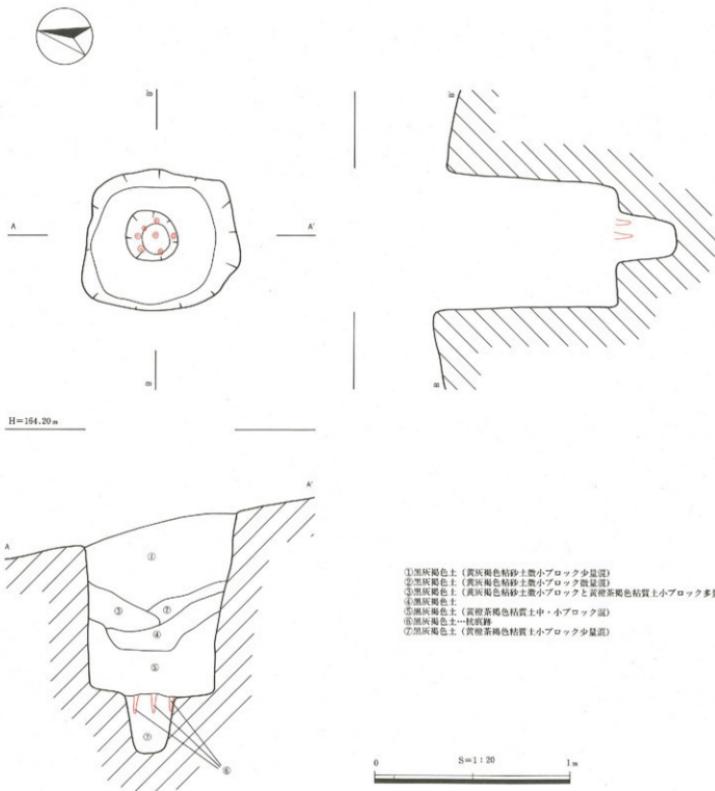
位 置 C 5 グリッドに存在し、斜面に立地する。

形 態 平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長軸92cm・短軸79cm、底面で長軸77cm・短軸75cm、深さ51cmを測る。

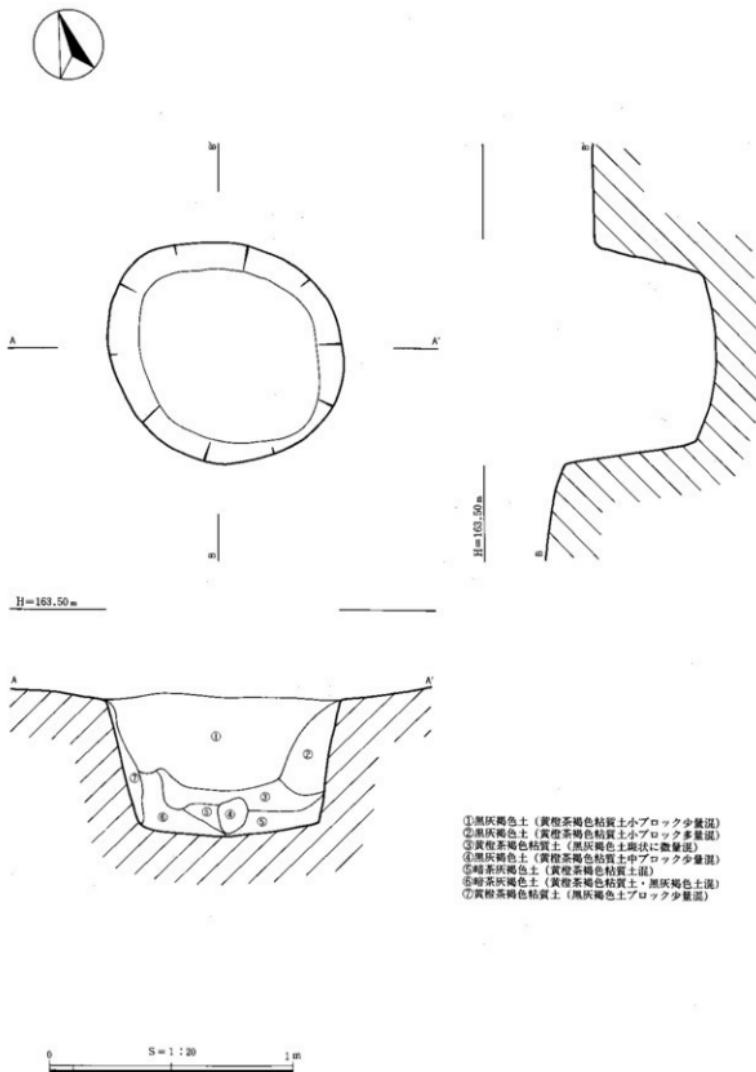
底面中央からやや外れたところに小ピットを一つ持つ。この径は6cm、深さ18cmを測る。その小ピットは、土坑底面に直接杭を立てた跡だと考えられる。

埋 土 基本的に埋土は、上層は黒灰褐色土系の土層、下層は黄褐色粘砂土系の土層からなり、自然堆積と考えられる。

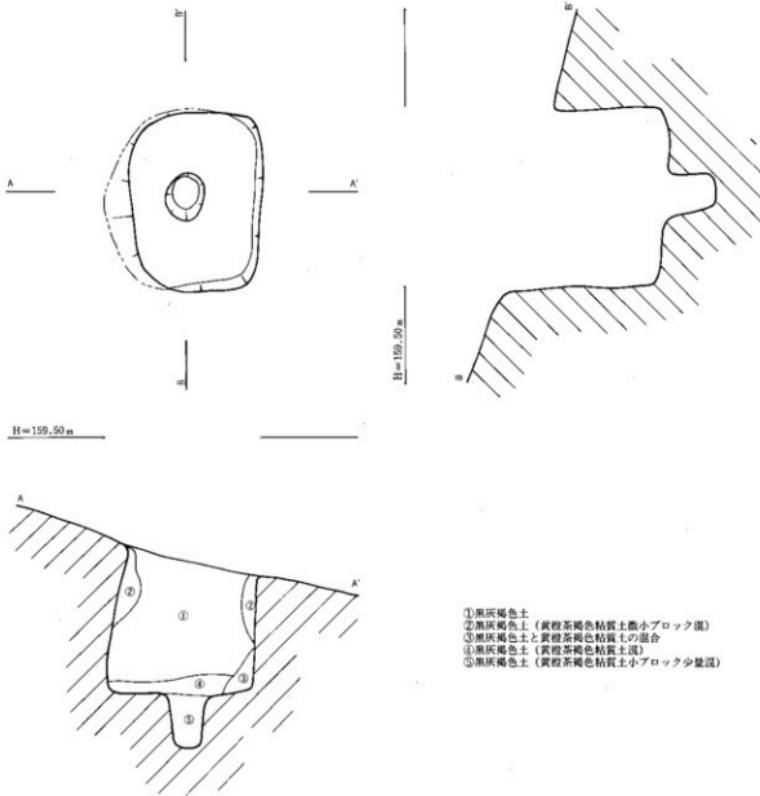
性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。



挿図22 SK-20 構造図

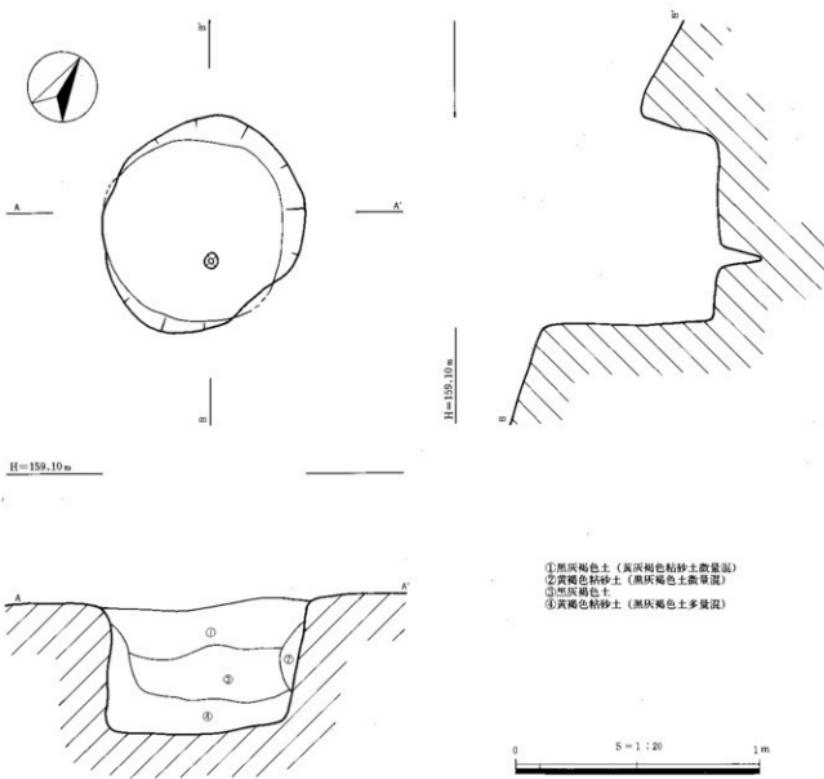


插図23 SK-21 造構図



- ① 黒灰褐色土
② 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土微小ブロック混)
③ 黒灰褐色土と黄橙茶褐色粘質土の混合
④ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土混)
⑤ 黒灰褐色土 (黄橙茶褐色粘質土小ブロック少量混)

挿図24 SK-22 造構図



摺図25 SK-23 造構図

SK-24

- 位 置 G 6 グリッドに位置し、尾根上の緩斜面に立地する。
- 形 態 平面形は橢円形を呈する。規模は、検出面で長軸102cm・短軸71cm、底面で長軸62cm・短軸43cm、深さ95cmを測る。
- 底面ピットを持ち、その規模は長軸22cm・短軸17cm、深さ38cmを測る。底面ピットの埋土中及び上面からは8cm大の甃を4つ検出した。これらは、底面ピット内に杭を立て固定する際に利用されたものと考えられる。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積したものと考えられる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

SK-25

- 位 置 H 5～H 6 グリッドにかけて位置し、尾根上の緩斜面に立地する。SK-26と重複している。
- 形 態 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面で長軸126cm・短軸81cm、底面で長軸83cm・短軸42cm、深さ108cmを測る。
- 底面ピットを持ち、その径18cm、深さ35cmを測る。底面ピットの埋土は暗黒茶灰褐色土で、この中に黒灰褐色土が棒状に入りこんでいる部分が一ヶ所認められる。これは木の杭を立てていた痕と考えられる。規模は径6cm・深さ22cmである。
- 埋 土 基本的に黒灰褐色土系の土層からなり、自然堆積したものと考えられる。
- また、土層の断面観察から、SK-26が構築され土坑内に土が堆積したのちに、その一部を壊して作られたことがわかる。
- 性 格 底面ピットの存在から、落し穴と考えられる。

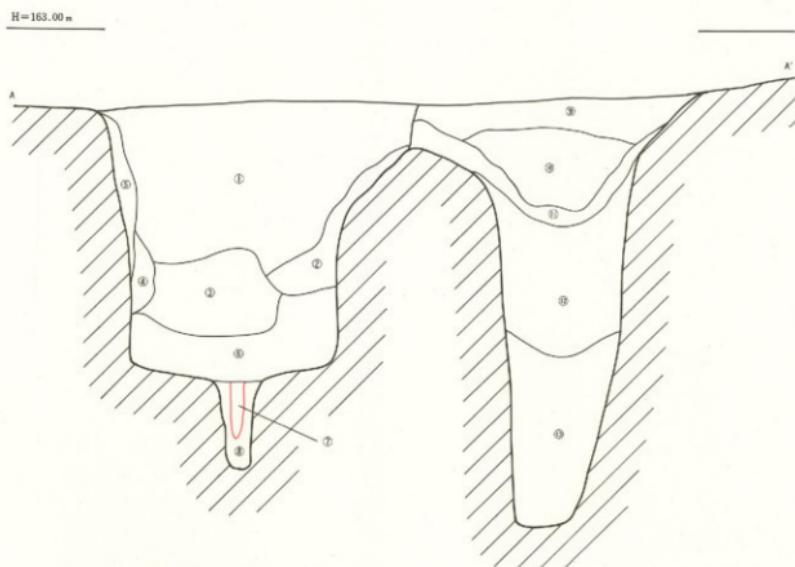
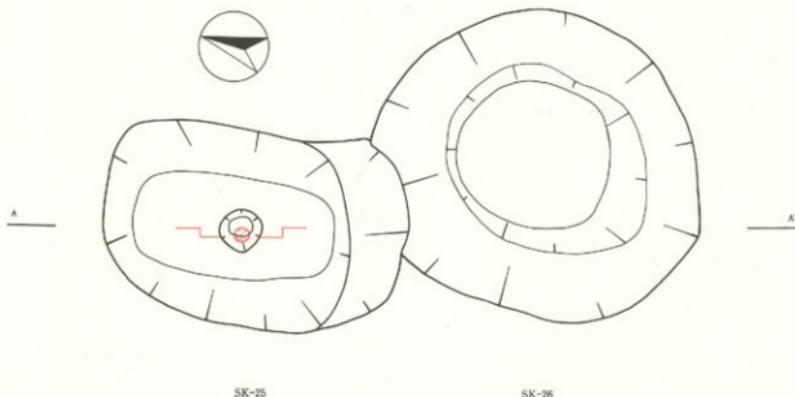
SK-26

- 位 置 H 5～H 6 グリッドにかけて位置し、尾根上の緩斜面に位置する。SK-25と重複している。
- 形 態 平面形はほぼ円形を呈する。規模は、検出面で長軸140cm・短軸122cm、底面で長軸65cm・短軸60cm、深さ174cmを測る。
- 底面ピットは存在しない。
- 埋 土 基本的に暗茶灰褐色土系の土層からなり、自然堆積したものと考えられる。土層の断面観察から、SK-25より以前に構築されたことがわかる。
- 性 格 底面ピットは存在しないが、形態及び周囲の土坑との埋土比較から落し穴と考えられる。

第2節 その他

溝状遺構

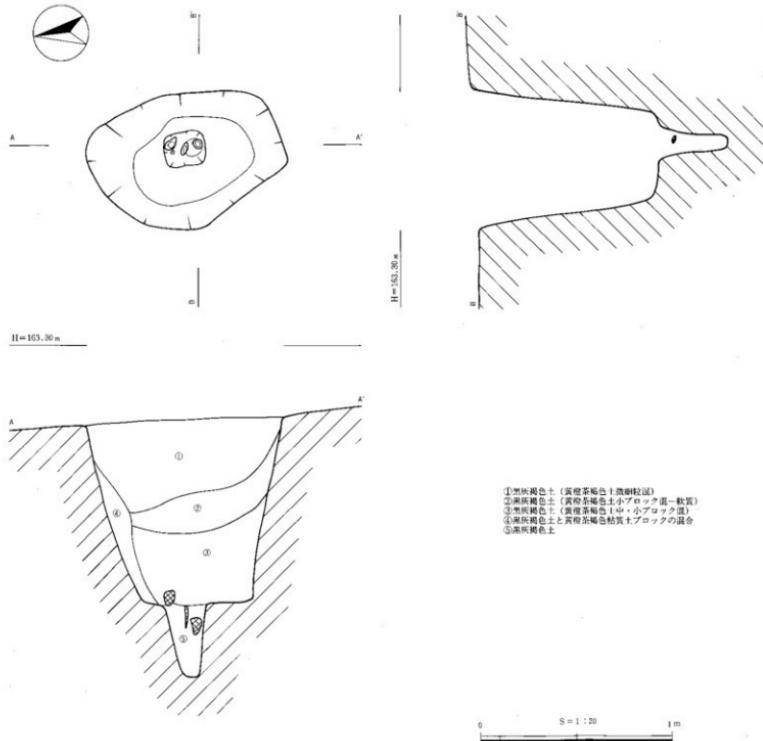
調査区E 6～H 6 グリッドにかけて長さ30mにわたって東西方向にのびる溝状遺構を検出した。しかし、埋土中には、現代の廐棄物が混入していたことから、近年の畑の耕作等にかかる現代の溝だと考えられる。



- ① 黑灰褐色土
- ② 黑灰褐色土 (暗茶灰褐色土・少量混入)
- ③ 黑灰褐色土 (暗茶灰褐色土・黃褐色褐色土微細粒微量混入)
- ④ 黑灰褐色土 (灰褐色土・黃褐色褐色土小ブロック少量混入)
- ⑤ 黑灰褐色土 (灰褐色土・黃褐色褐色土中・小ブロック多量混入)
- ⑥ 黑灰褐色土・黃褐色褐色土粘質土中・小ブロックの混合
- ⑦ 黑灰褐色土・灰褐色土
- ⑧ 黄褐色褐色土
- ⑨ 暗茶灰褐色土
- ⑩ 暗茶灰褐色土 (黑灰褐色土微量混入)
- ⑪ 暗茶灰褐色土 (黄褐色褐色粘質土薄片状に混入)
- ⑫ 暗茶灰褐色粘質土 (黄褐色褐色粘質土粘土状に混入)
- ⑬ 暗茶灰褐色粘質土 (粘性土)

0 S=1:20 1 m

插図26 SK-25・26 遺構図



挿図27 SK-24 造構図

第3節 出土遺物

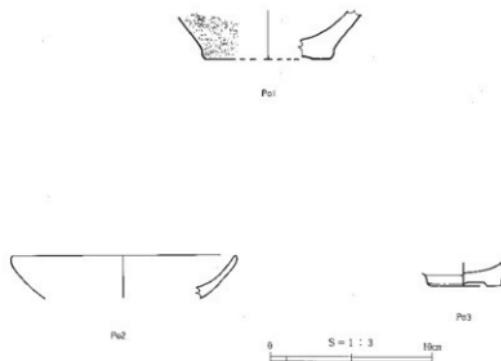
今回の調査では、計3点の土器片を検出したのみである。Po1はSK-2上層より出土した縄文土器の底部片である。Po2は表土中より出土した染付磁器であり、伊万里焼の皿片と思われる。Po3は瀬戸・美濃焼の天目茶碗底部片である。

いずれも遺跡・遺構の直接の年代を示す資料とは言い難い。

遺物番号	種別	器形・部位	時期	出土位置
Po1	縄文土器	底部	縄文時代後期～晩期	SK-2上層
Po2	染付(伊万里焼)	皿口縁	18世紀後半～19世紀初頭	表土中
Po3	瀬戸・美濃	碗底部	17世紀初頭	表土中

なお、前年度に岸本町教育委員会が行った試掘調査の際にも遺物が6点出土している。

遺物番号	種別	時期
KN T-1 No1	縄文土器	縄文時代後期～晩期
" No3	"	"
T-9 No4	"	"
" No5	"	"
T-21 No9	"	"
" No10	"	"



挿図28 小町第1遺跡出土遺物

表1 小町第1遺跡 土坑一覧表

遺構名	押図番号	図版番号	グリッド	平面形	検出面(cm)			底面(cm)		底面ピット(cm)		杭痕跡(cm)		備考
					長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	径	深さ	径	深さ	
SK-1	4	3	B 4	楕円形	118	71	117	69	34	15	16			
	2	5	2	B 4	楕円形	86	82	76	83	78	20	35	4	19 杭2
	3	6	3	F 6	楕円形	101	72	85	75	48	20	39		
	4	7	3	H 5	円形	96	89	160	50	44				
	5	8	4	H 5	長方形	259	145	199	58	47				
	6	9	5	F 5	楕円形	84	73	105	73	63	19	30		
	7	10	3	G 4	—	(88)	(65)	179	—	30				
	8	11	6	E4・E5	圓丸長方形	87	75	85	65	57	19	35	6	20 杭3
	9	12	7	D 4	楕円形	119	85	109	69	59	14	20		
	10	13	7	G 5	楕円形	78	74	82	82	69	11	18		
	11	14	7	G 5	楕円形	71	63	90	87	78				
	12	15	7	G 5	円形	96	85	105	52	45	24	17		
	13	16	8	G 5	圓丸長方形	119	93	120	49	34		7	17	杭2
	14	17	8	F 5	楕円形	117	102	152	64	60				
	15	18	8	F 5	楕円形	92	88	116	71	65				
	16	19	9	E 5	楕円形	106	92	172	69	55				
	17	20	9	E 5	円形	74	68	12	67	60		7	13	杭2
	18	20	10	E 5	楕円形	88	64	27	61	41	17	42		礫あり
	19	21	12	I 7	不定形	137	100	167	53	50				
	20	22	11	J 8	圓丸長方形	90	80	91	70	64	28	30	3	10 杭7
	21	23	12	I 7	楕円形	102	91	58	86	80				
	22	24	12	C 4	圓丸長方形	74	51	61	71	51	17	21		
	23	25	12	C 5	楕円形	92	79	51	77	75		6	18	杭1
	24	27	13	G 6	楕円形	102	71	95	62	43	22	38		礫あり
	25	26	13	H5・H6	圓丸長方形	126	81	108	83	42	18	35	6	22 杭1
	26	26	13	H5・H6	円形	140	122	174	65	60				

※()内の数値は、遺構が調査地外に及んでいるため、検出できた部分の値を示す。

杭痕跡の値は、杭痕跡が複数存在したものは、その平均値を示す。

第4章　まとめ

1. 小町第1遺跡の概要

小町第1遺跡では、26基の土坑を検出した。これらの土坑は、その立地や構造から狩獵に使われた落し穴と考えられる。時期を判断する資料は確認できなかったが、一般にこの種の落し穴の時期は縄文時代と考えられている。

2. 小町第1遺跡の土坑について

(1) 土坑の分類

小町第1遺跡では、総計26基の土坑を検出したが、このうち上部を大きく削平された2基を除く計24基を深さ別に示したのが、右の表2である。これをみると、資料総数は不足しているものの、ピークの異なる2つの正規分布が存在することが想定される。ひとつは160~180cmを中心としたグループであり、もうひとつは80~110cmを中心としたグループである。両者は構造的にも違いが認められ、前者には底面に杭を立てるためのビットがみられないのに対し、後者にはほぼ全部の底面にビットが設けられている。

以上のことから、小町第1遺跡には異なる2つのタイプの土坑が存在しているということになる。以下、前者の「深くて、底面ビットの存在しない土坑」をAタイプ、後者の「比較的浅くて、底面ビットの存在する土坑」をBタイプとして検討を行う。

(2) Aタイプの土坑について

Aタイプの土坑は、上述のように非常に深いのが特徴である。深さの平均は165cmで、最も深いものは2mにも達する。

埋土は黒灰褐色土（一般にクロボクと呼ばれるもの）の下に、灰褐色系あるいは暗茶褐色系の土が厚く堆積しており、なかにはSK-26のように、黒灰褐色土ではなく灰褐色系の土のみからなるものもある。

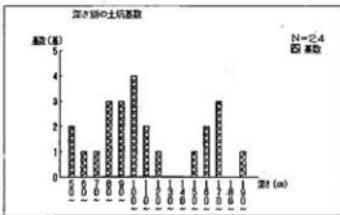
底部にビットが存在しないため、構造的に落し穴とする根拠には欠けるが、立地状況はBタイプと共通しており、また地面を深く掘り込むという遺構の性格から、狩獵用の落し穴と判断する。

(3) Bタイプの土坑について

Bタイプの土坑は、底面に杭を立てた痕と思われるビットを有するのが特徴である。このビットの埋土は暗茶褐色土であるが、そのなかに黒褐色土が径3cm・深さ10~20cm程度、棒状に複数入り込んでいるものが認められる（SK-2・8・20・25）。この黒褐色土が杭の部分と考えられ、このことから、底面中央に穴を掘って杭を立て、周囲を埋め戻して固定したか、あるいは先に埋め戻してそこに杭を立てたものと復元される。またSK-24のように、杭を固定するために小蝶をビットの周りに置いたものもある。

一方、これらとは違って直接底面に杭を立てたと思われるものも存在する（SK-13・17）。確認数は2基と少ないが、基本的なBタイプとは若干異なる構造をもつことから、B'タイプと設定する。このうちSK-13は深さ120cmで、Bタイプのなかでは最も深い値を示す（SK-15は上部削平のため深さ不明）。杭の安定という点では、穴を掘って埋め戻す方が優れていると考えられ、よって基本的なBタイプの方が一般化したものと思われる。

底面のビットを除く土坑部分の埋土は、基本的にクロボクと呼ばれる黒灰褐色土からなり、Aタイプのようにその下側に他の土が堆積する様子は認められない。



(4) AタイプとBタイプの関係について

AタイプとBタイプの形態差の要因については、土坑を掘った集団の違い・捕獲対象物の違い・立地や地質の条件の違い・時間的要因等が考えられた。このなかで、立地・地質状況の違いといういは、AタイプとBタイプに差は認められないので否定される。また集団の違いや捕獲対象物の違いといは、今回の調査の結果から明らかにすることはできなかった。従って、以下、時間的要因について検討を行う。

小町第1遺跡では、AタイプのSK-26とBタイプのSK-25が重複しており、SK-25は深さ174cmのSK-26が完全に埋没した後に、その一部を壊して掘られている。従って、SK-25とSK-26に関しては、SK-26の方がはるかに古いと考えられる。

次に両タイプの埋土の比較を行う。先のAタイプのSK-26には、堆積埋土として一般的な黒灰褐色土（クロボク）はみられず、灰褐色系の土で占められている。他のAタイプのものについても、黒灰褐色土の下には別の土がかなり堆積しており、ほぼ黒灰褐色で占められているBタイプとは異なっている。これはいずれも自然堆積と考えられ、Aタイプの下層の土はBタイプの埋土よりも古い時期に堆積した可能性が考えられる。

これと同様の状況は、近接する会見町越敷山遺跡群でも認められる。ここでも土坑は小町第1遺跡と同様に分類できるが、Aタイプに相当するものの埋土は「黒色系」、Bタイプに相当するものの埋土は「灰色・黄色系」あるいは「黒色系、下位に黄色系」と報告されている。両タイプの重複はI-1a区のSK-14とSK-15の間でみられ、Aタイプに相当するSK-15（灰色・黄色系の埋土）がBタイプに相当するSK-14（黒色系の埋土）に先行している。

このように、AタイプとBタイプの間には時間差が存在するという要素をいくつか指摘することができる。これを前提とするならば、落し穴は「深くて、底面に特別な施設をもたない」Aタイプが古く、「比較的浅くて、底面に杭を立てる」Bタイプが新しいということになる。またBタイプのなかには、「底面に穴を掘らずに杭を直接立てたもの（B'タイプ）」が存在するが、構造が単純で杭の安定という点で劣ると思われるこのタイプのものが、Bタイプのなかでは最も深いという点もこのことと対応すると考えられる。従って、B'タイプはBタイプのなかでも古い段階のものである可能性が指摘できる。

以上のことから、土坑の深さと底面の構造は相関して変化していくといったという仮説が成立つ。すなわち、土坑の底部に杭を立てる構造が定着し、対象動物を確実に捕らえることができるようになったことで、掘削に労力を要する深い土坑を掘る必要はなくなったといえるのではないだろうか。もっとも、現時点では資料の絶対数が不足しており、また遺構の性格上遺物を伴うことがなく抽出される情報も限られているために、時間的要因を導く要素を指摘することからこのような仮説を立てたにすぎない。今後の有効な情報となる資料の増加を待って再検討したい。

〈参考文献〉

(論文・論考)

- | | |
|----------------------------------|--------------------------|
| 稻田孝司 1993 「西日本の縄文時代落し穴獣」『論苑 考古学』 | 天山舎 |
| 今村啓爾 1983 「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究』2 | 雄山閣出版 |
| (報告書一文献番号は表3「鳥取県内落し穴一覧表」と対応) | |
| 1 「背木遺跡発掘調査報告書」I～III | 1976～1978 鳥取県教育委員会 |
| 2 「尾高御建山遺跡・尾高古墳群」 | 1994 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 3 「尾高御建山遺跡II・尾高古墳群II・尾高1号横穴墓」 | 1995 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 4 「東宗像遺跡」 | 1985 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 5 「泉中峰・泉前田遺跡」 | 1994 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 6 「百塚第5遺跡・小波狭間谷遺跡・泉上経前遺跡」 | 1995 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 7 「諏訪遺跡群発掘調査報告書I」 | 1981 米子市教育委員会 |
| 8 「諏訪遺跡群発掘調査報告書II」 | 1982 米子市教育委員会 |
| 9 「諏訪遺跡群発掘調査報告書III」 | 1982 米子市教育委員会 |
| 10 「諏訪遺跡群発掘調査報告書IV」 | 1983 米子市教育委員会 |
| 11 「喜多原第2遺跡発掘調査報告書」 | 1987 米子市教育委員会・喜多原遺跡発掘調査団 |
| 12 「上福万妻神遺跡」 | 1991 米子市教育委員会 |
| 13 「奥谷掘越谷遺跡」 | 1992 米子市教育委員会 |
| 14 「三部野遺跡発掘調査報告書」 | 1990 溝口町教育委員会 |
| 15 「清水谷遺跡」 | 1992 西伯町教育委員会 |
| 16 「久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書」 | 1984 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 17 「大寺原遺跡発掘調査報告書」 | 1981 岸本町教育委員会 |
| 18 「小町第1遺跡」 | 1996 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 19 「百塚第1遺跡」 | 1989 淀江町教育委員会 |
| 20 「百塚古墳群発掘調査報告書I」 | 1992 淀江町教育委員会 |
| 21 「百塚第7遺跡（8区）」 | 1995 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 22 「井手挾遺跡発掘調査報告書」 | 1987 淀江町教育委員会 |
| 23 「天下畠遺跡」 | 1994 財団法人鳥取県教育文化財団 |
| 24 「越敷山遺跡群」 | 1992 会見町教育委員会・岸本町教育委員会 |
| 25 「大山山麓遺跡群調査報告書」3 | 1978 鳥取県教育委員会 |
| 26 「茶畑第2遺跡発掘調査報告書」 | 1990 名和町教育委員会 |
| 27 「八重第3遺跡発掘調査報告書」 | 1987 中山町教育委員会 |
| 28 「小松谷遺跡」 | 1975 中山町教育委員会 |
| 29 「化粧川遺跡発掘調査報告書」 | 1989 赤碕町教育委員会 |
| 30 「森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書」 | 1987 東伯町教育委員会 |
| 31 「大峰遺跡発掘調査報告書」 | 1985 東伯町教育委員会 |
| 32 「大畑遺跡発掘調査報告書」 | 1989 東伯町教育委員会 |
| 33 「水溜り・賀籠拾場遺跡・森藤第3遺跡発掘調査報告書」 | 1988 東伯町教育委員会 |
| 34 「背木第4遺跡発掘調査報告書」 | 1980 大栄町教育委員会 |
| 35 「大谷11号墳発掘調査報告書」 | 1990 大栄町教育委員会 |
| 36 「横峰遺跡発掘調査報告書」 | 1986 関金町教育委員会 |
| 37 「大山池遺跡横峰地区（落し穴）発掘調査報告書」 | 1989 関金町教育委員会 |

38『大山遺跡発掘調査報告書（C・D区）』	1989	倉吉市教育委員会
39『イキス遺跡発掘調査報告書』	1989	倉吉市教育委員会
40『大仙峰遺跡発掘調査報告書』	1990	倉吉市教育委員会
41『頭根後谷遺跡発掘調査報告書』	1991	倉吉市教育委員会
42『後口野1号墳発掘調査報告書』	1991	倉吉市教育委員会
43『立道東古墳発掘調査報告書』	1993	倉吉市教育委員会
44『中尾遺跡発掘調査報告書』	1992	倉吉市教育委員会
45『長谷遺跡発掘調査報告書』	1992	倉吉市教育委員会
46『大日寺遺跡群発掘調査報告書』	1993	倉吉市教育委員会
47『丸山遺跡発掘調査報告書』	1984	三朝町教育委員会・花園大学考古学研究室
48『万代寺遺跡発掘調査報告書』	1983	郡家町教育委員会
49『鶴田東山遺跡・鶴田合清水遺跡』	1995	財団法人鳥取県教育文化財団
50『百塚遺跡群II』	1993	淀江町教育委員会

表3 鳥取県内落し穴一覧表

番号	遺跡名	所在地	土坑数	縦坑分剖	横窓有り	縦窓分孔	備考	文獻番号
1	青木	米子市	228	185		43		1
2	尾高御建山		69	58	4	2		2・3
3	東宗像		10	10				4
4	泉中峰・泉前田		21	11	1	9		5
5	泉上経前		3	2		1		6
6	樋ノ口第3		9	8		1		7
7	樋ノ口地区		3	3				8
8	成ヶ谷西（諏訪1号墓下層）		2	2				9
9	別所1号墳下層		2	1		1		11
10	諏訪遺跡群中原地区		1	1				8
11	諏訪遺跡群新田地区		4	4				8
12	福市吉塚地区		2	2				8
13	喜多原第2		2	2				11
14	上福万妻神		1			1		12
15	奥谷塙越谷		8	3		5		13
16	三部野	溝口町	2	1	1			14
17	清水谷	西伯町	11	10		1		15
18	林ヶ原	岸本町	6	5				16
19	久古第1		2	1		1		2
20	大寺原		5	5		1		17
21	小町第1		26	13	3	10		18
22	小町越城野原第1		5	3		2		—
23	坂中第5		6	5		1		—
24	坂長宮田ノ上		17	15		2		—
25	百塚第1	淀江町	2	2				19
26	百塚第4		20	8		12		20
27	百塚第5		66	31	2	33		6
28	百塚第7（8区）		54	27	16	11		21
29	小波紫間谷		3	2		1		6
30	井手塚		1	1				22
31	大下畑		2	2				23
32	越敷山遺跡群	会見町	341	265		76		24
33	勝負勝負の峰	名和町	3	1		2		25
34	茶畑第2		1		1			26
35	八重第3	中山町	29	25	1	2		27
36	小松谷		4	2		2		28
37	化粧川	赤崎町	47	13		34		29
38	森藤第1・2	東伯町	32	16		16		30
39	大峰		16	8		8		31
40	大畠		26	18		8		32
41	水溜り・賀龍捨場		4			4		33
42	森藤第3		5	2		3		33
43	青木第4	大栄町	9	8	1			34
44	大谷11号墳下層		2					35
45	横峰	関金町	3			3		36
46	大山池横峰地区		1	1	1	1		37
47	大山	倉吉市	4	1		1		38
48	イキス		3	2		1		39
49	大山峰		1	1				40
50	頭根後谷		4	3		1		41
51	後口野1号墳		2	1		1		42
52	立道東吉墳群		6	5		1		43
53	中尾		84	31	26	5		44
54	長谷		57	28	6	21		45
55	大日寺遺跡群		1	1				46
56	丸山	三朝町	7	1		6		47
57	万代寺	郡家町	53				内訳不明	48

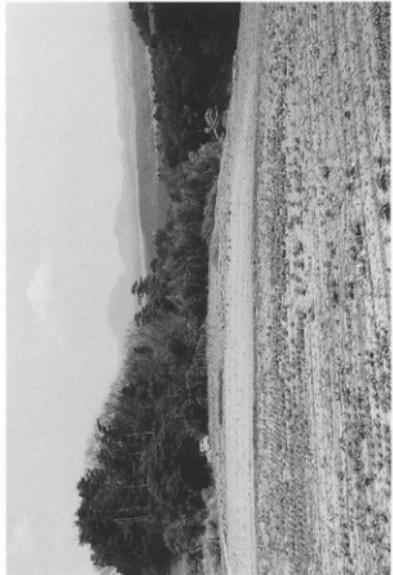
番号	遺跡名	所 在 地	土坑数	遺物件数	有無	遺物件数	備 考	文獻番号
59	鶴田東山	会見町	3	2		1		49
60	鶴田合清水	〃	1			1		49
61	百塚遺跡群	淀江町	64	42		22		50

表4 遺跡一覧表 小町第1遺跡

遺構名	処理番号	遺構の種別	出土遺物	時期	備考
SK-1	SK-1	上坑(落し穴)	なし	縄文時代?	底面ピット有り
SK-2	SK-2	"	縄文土器片	"	"・杭痕跡有り
SK-3	SK-3	"	なし	"	"
SK-4	SK-4	"	"	"	
SK-5	SK-5	"	"	"	
SK-6	SK-6	"	"	"	底面ピット有り
SK-7	SK-7	"	"	"	
SK-8	SK-8	"	"	"	底面ピット・杭痕跡有り
SK-9	SK-9	"	"	"	"
SK-10	SK-10	"	"	"	"
SK-11	SK-11	"	"	"	
SK-12	SK-12	"	"	"	底面ピット有り
SK-13	SK-13	"	"	"	杭痕跡有り
SK-14	SK-14	"	"	"	
SK-15	SK-15	"	"	"	
SK-16	SK-16	"	"	"	
SK-17	SK-17	"	"	"	杭痕跡有り
SK-18	SK-18	"	"	"	底面ピット有り
SK-19	SK-19	"	"	"	
SK-20	SK-20	"	"	"	底面ピット・杭痕跡有り
SK-21	SK-21	"	"	"	
SK-22	SK-22	"	"	"	底面ピット有り
SK-23	SK-23	"	"	"	杭痕跡有り
SK-24	SK-24	"	"	"	底面ピット有り
SK-25	SK-25	"	"	"	"・杭痕跡有り
SK-26	SK-26	"	"	"	
溝状遺構	SD-1	溝状遺構	"	現代	

図版

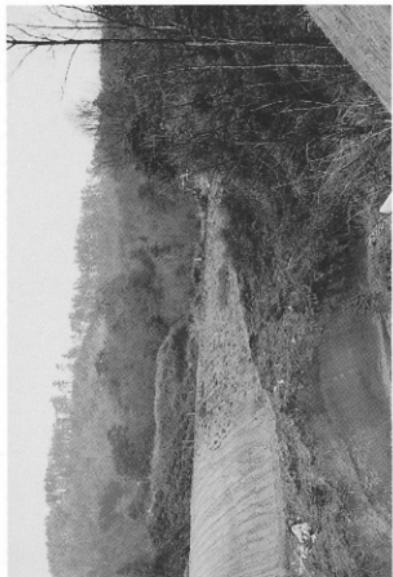
図版 1



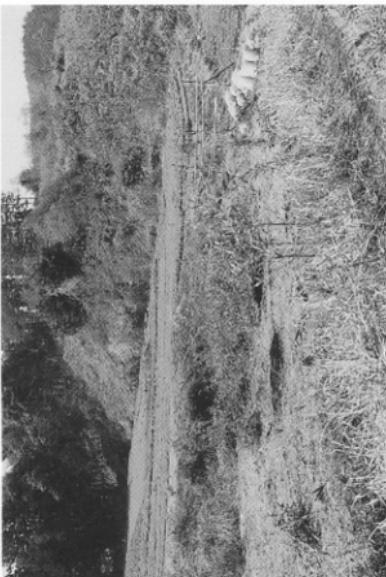
小町第1道路調査前遠景（南より）



小町第1道路調査前遠景（北より）



小町第1道路調査前遠景（東北より）

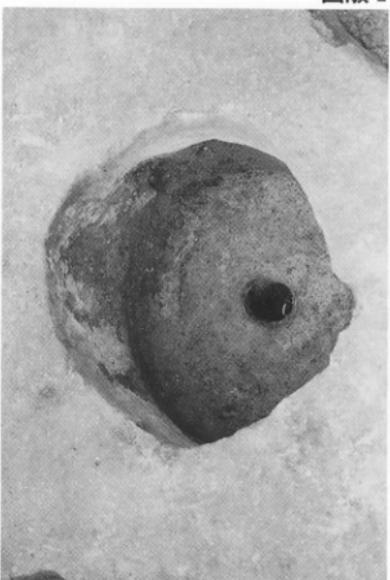


小町第1道路調査前遠景（北東より）

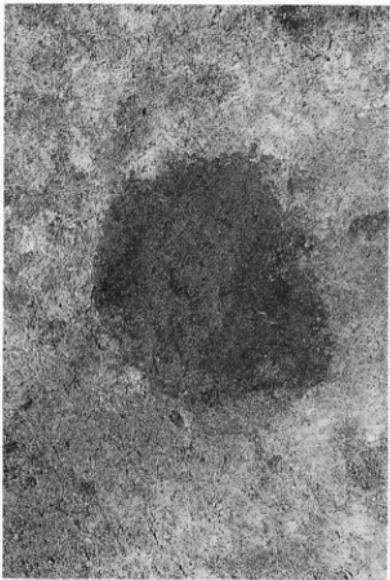
図版 2



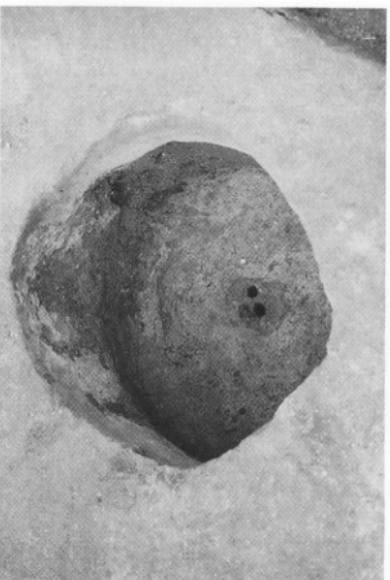
SK-2 底面ヒット検出状況（東より）



SK-2 光源状況（東より）

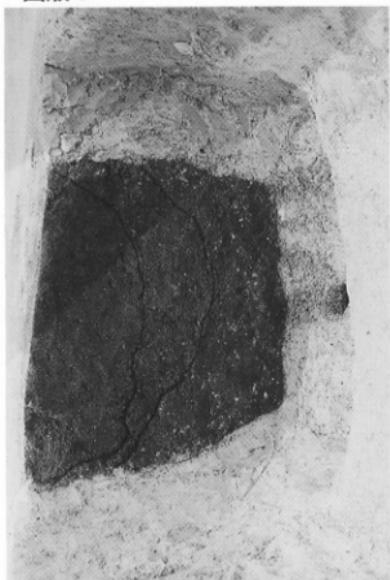


SK-2 検出状況（東より）



SK-2 犀瘤跡完端状況（東より）

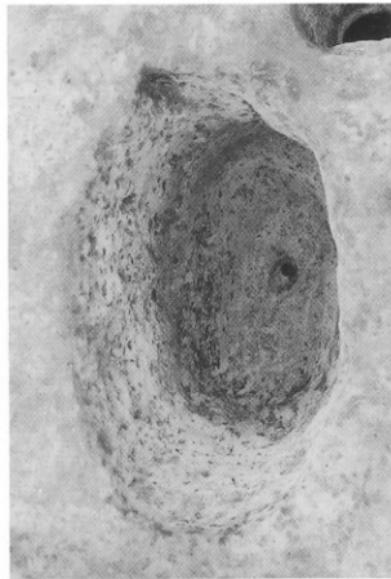
図版 3



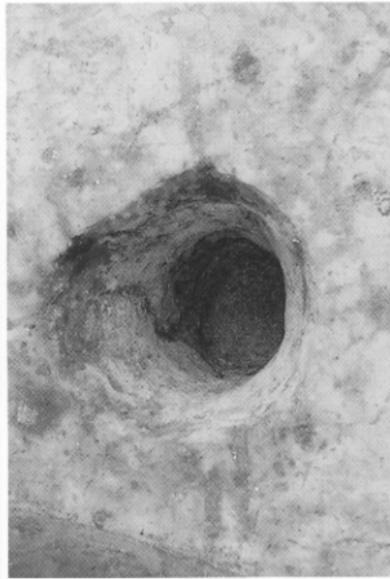
SK-3 土層断面 (南東より)



SK-7 土層断面 (南より)



SK-1 完掘状況 (西より)



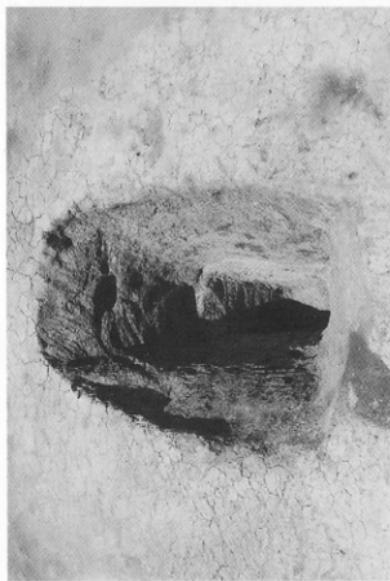
SK-4 完掘状況 (北東より)



SK-5 土層断面（南より）



SK-5 検出状況（西より）

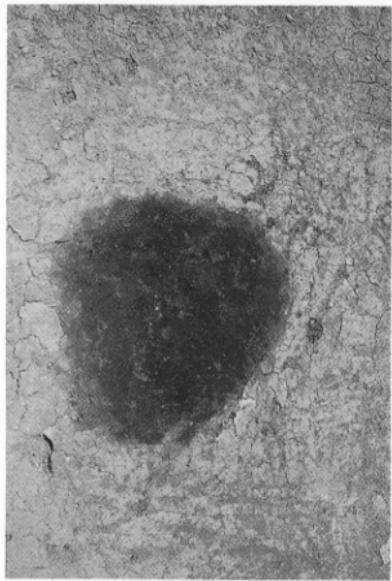


SK-5 先端状況（北より）

図版 5



SK-6 検出状況（東より）

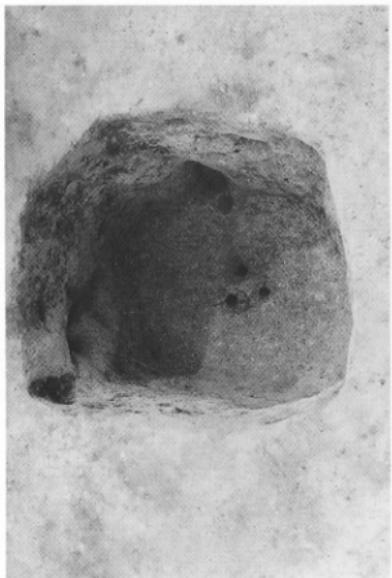


SK-6 土層断面（東より）

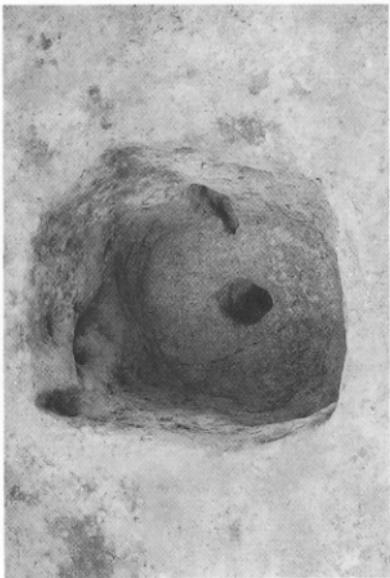


SK-6 完掘状況（東より）

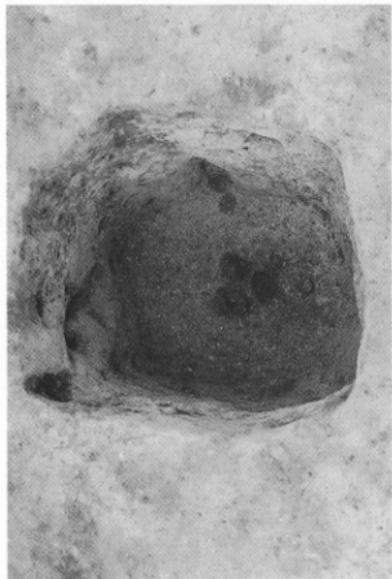
図版 6



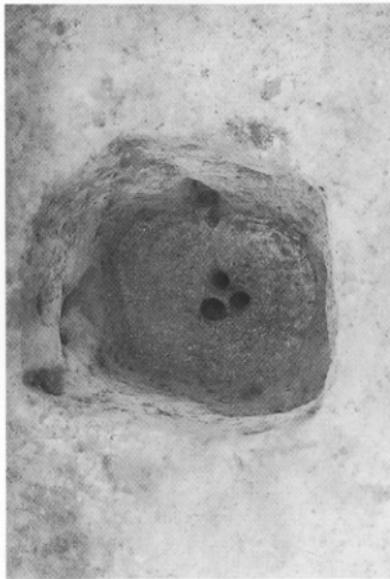
SK-8 桟痕跡（杭部分）完掘状況（北より）



SK-8 完掘状況（北より）

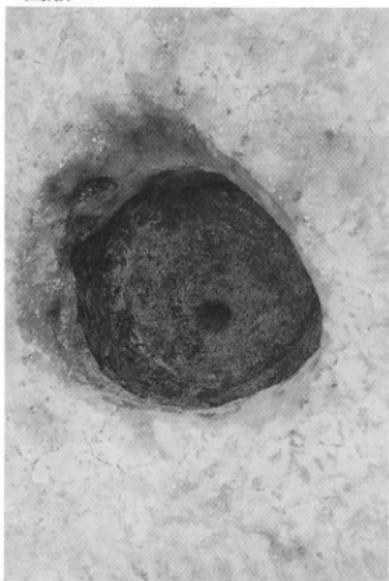


SK-8 桟痕跡検出状況（北より）

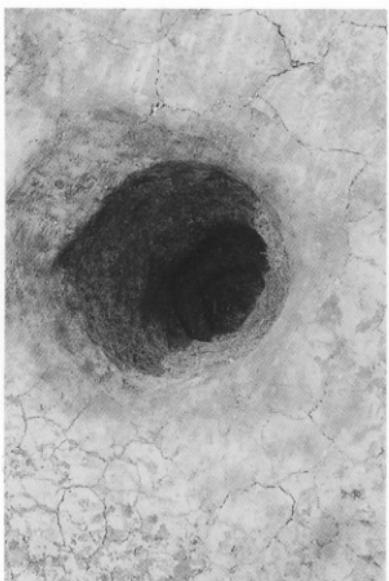


SK-8 桟痕跡完掘状況（北より）

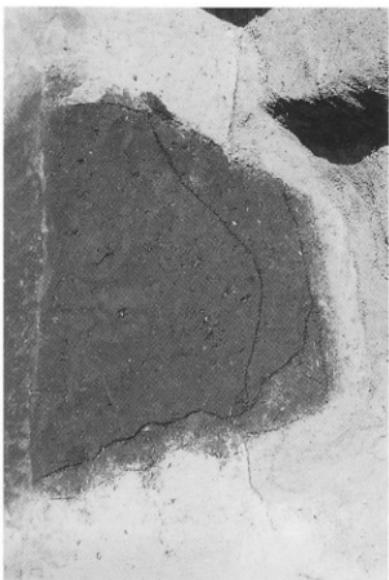
図版 7



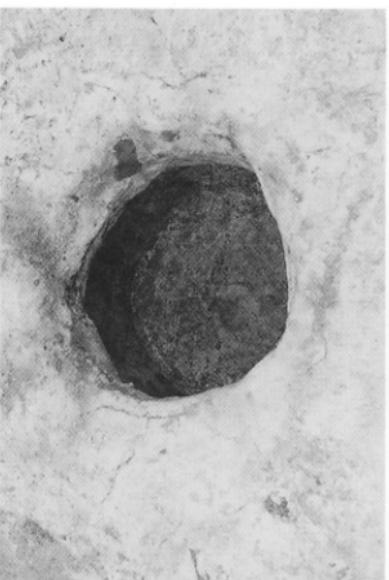
SK-10 完掘状況（北より）



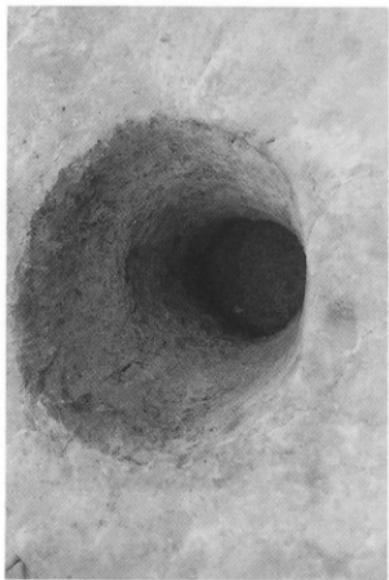
SK-11 完掘状況（北東より）



SK-9 土層断面（西より）



SK-12 完掘状況（北より）



SK-14 完掘状況（北より）



SK-15 完掘状況（南より）

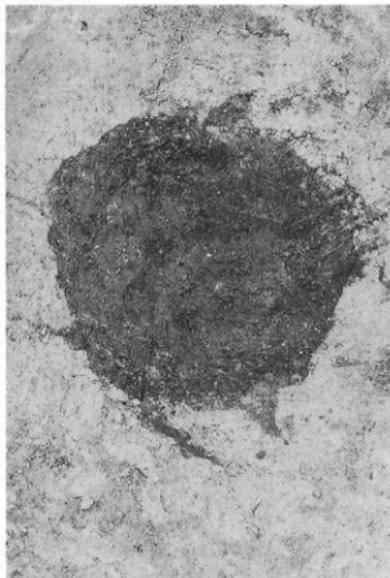


SK-13 完掘状況（北より）



SK-15 土層断面（南東より）

図版 9



SK-17 掘出状況（東より）



SK-17 完整状況（東より）



SK-16 土層断面（東より）



SK-17 土層断面（東より）



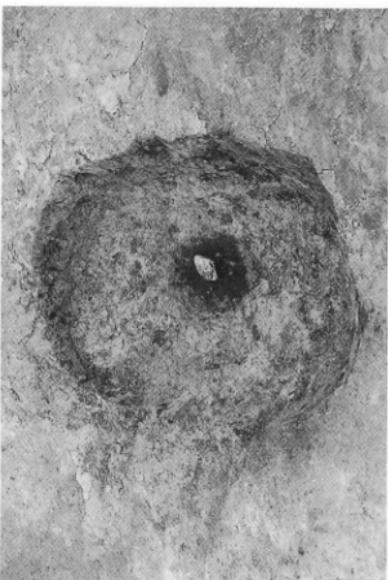
SK-18 断面 (東より)



SK-18 実掘状況 (北より)

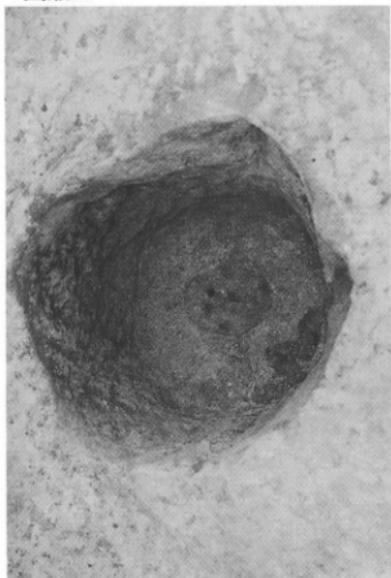


SK-18 掘出状況 (北より)

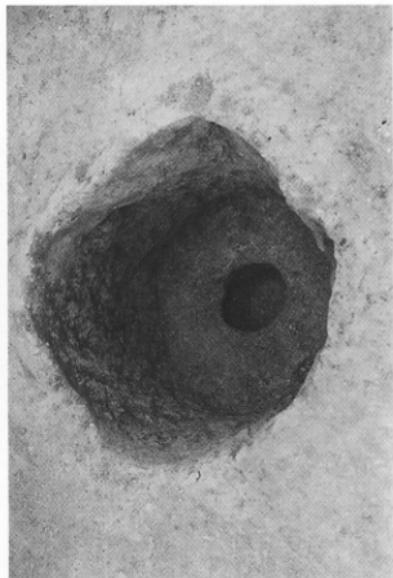


SK-18 底面ピット検出状況 (南より)

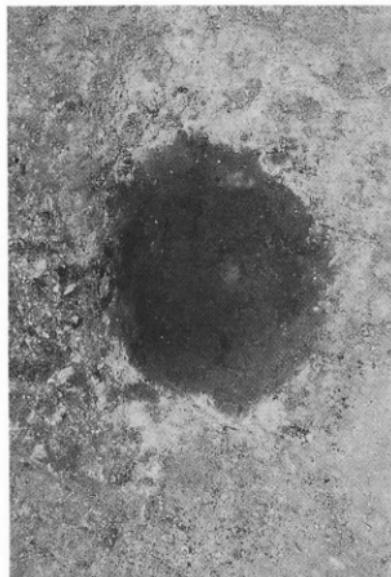
図版11



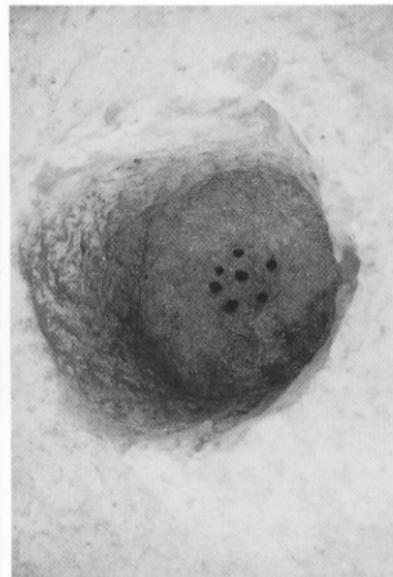
SK-20 底面ピット検出状況 (南より)



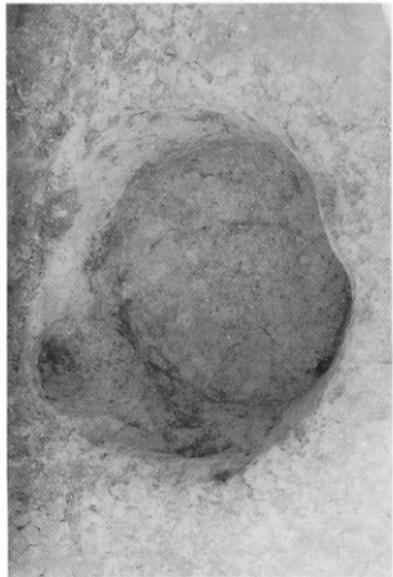
SK-20 完振状況 (南より)



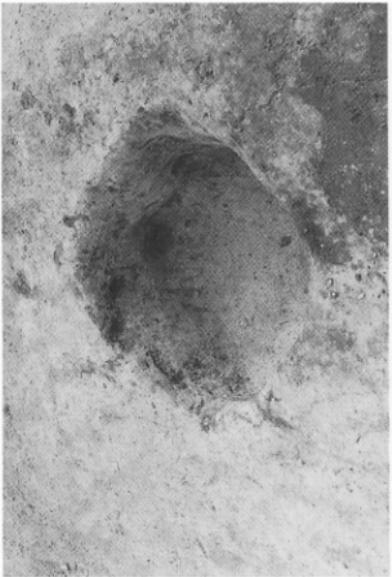
SK-20 検出状況 (西より)



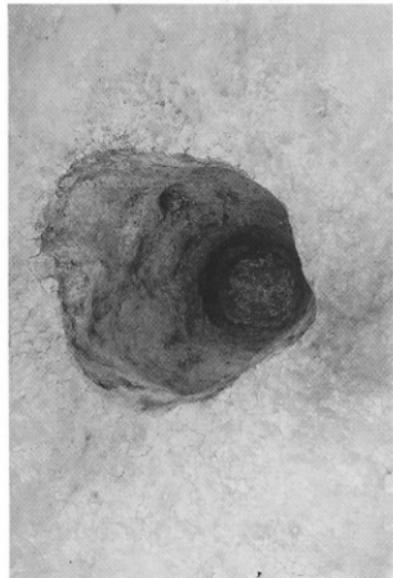
SK-20 振動完振状況 (南より)



SK-19 完整状況（南より）



SK-21 完整状況（南より）

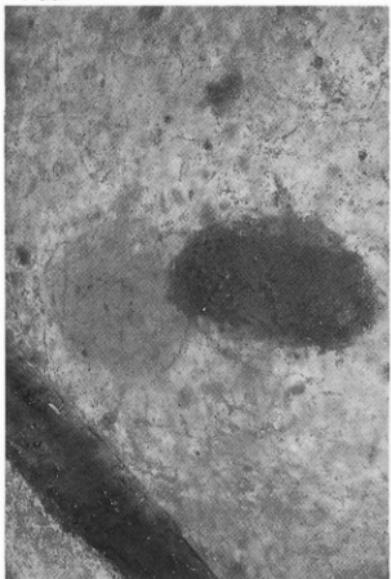


SK-19 完整状況（南より）



SK-22 完整状況（北より）

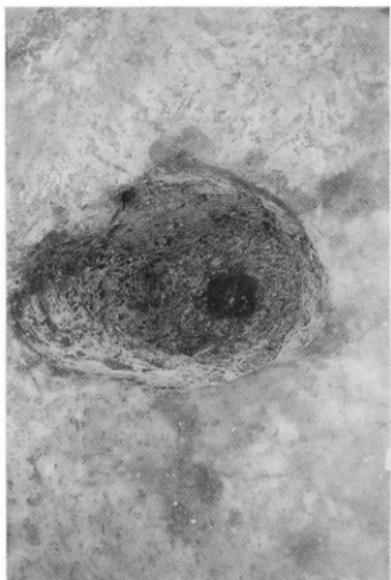
図版13



SK-25、26 検出状況 (北より)



SK-25、26 械出状況 (西南より)



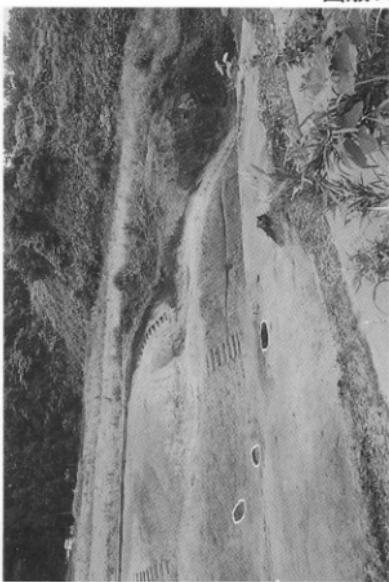
SK-24 底面ピット検出状況 (北より)



SK-25、26 土層断面 (西南より)



調査後全景（南より）



調査後全景（北より）

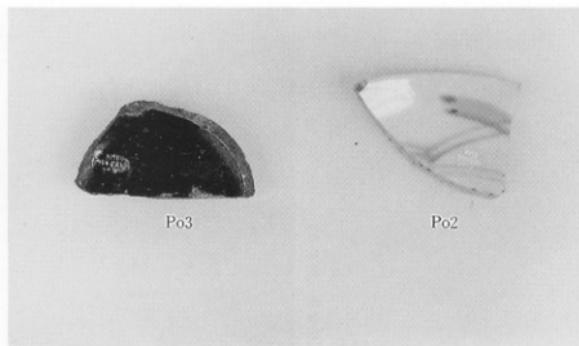


調査区西側部分（南より）

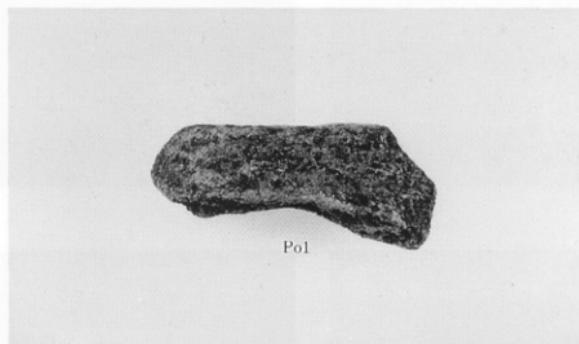


調査後全景（南より）

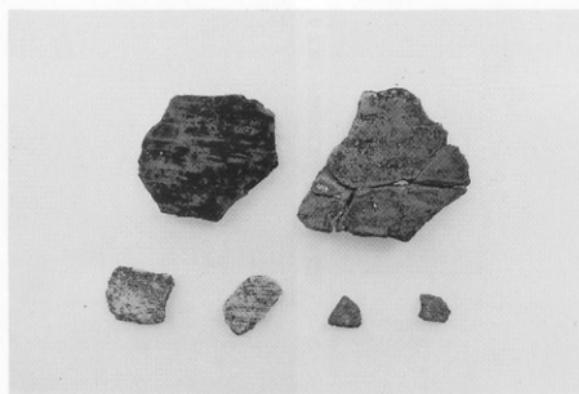
図版15



小町第1遺跡 出土遺物



小町第1遺跡 出土遺物



試掘調査時 出土遺物



現地説明会



発掘作業参加者

報告書抄録

書名	小町第1遺跡							
副書名	県営西伯地区広域農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	41							
編著者名	山田真一 谷村憲一 鬼頭紀子 橋口友枝							
編集機関	財團法人 鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-01 鳥取県岩美郡国府町宮下1260 TEL(0857)27-6711							
発行年月日	西暦1996年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小町第1遺跡	鳥取県西伯郡 岸本町小町 字谷奥	31383	190	35°21'38"	133°24'46"	19950410 ~19950711	2,853.6	道路（県営 西伯地区広 域農道）建 設に伴う調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小町第1遺跡	土坑	攢文時代	土坑	26基	繩文土器片 磁器片 陶器片	1 1 1		

鳥取県教育文化財団調査報告書 41
県営西伯地区広域農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県西伯郡岸本町

小町第1遺跡

発行 1996年2月28日

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

〒680 鳥取市東町1丁目271番地

電話 (0857)26-8397

印刷 山本印刷株式会社

〒682 倉吉市広栄町971-21番地

電話 (0858)22-6171